心象地理

デレク・グレゴリー*
(潟山 健一**・大城 直樹*** 訳)

Derek GREGORY
Imaginative Geographies
Progress in Human Geography 19, 1995, pp. 447-485.
© 1997 by Edward Arnold

地理〔的現実〕の外に出たり超越したりすることが出来ないのと丁度同じように、われわれは誰しも地理〔的現実〕に関する闘争から完全に逃れることは出来ない。この闘争は、軍隊や兵器のみならず、観念や形態やイメージや想像とも関わっているが故に、複雑でありまた興味深いのである（エドワード・サイード：『文化と帝国主義』, p. 7)。

I 地理学再考

私はこの論文の題目を、地理的想像力 a geographical imagination が自分にとっては欠くことの出来ないものであるとする類希な批評家の一人、エドワード・サイード Edward Said から拝借している。彼はあるとき次のように明言していた。「気づいてみれば、自分のしていること」は「地理について考え直すということ」なのであると。今日、比較文学の教授たちがこのような話題を取り上げることはまず無いが、サイードが、「…今やわれわれは、地理に関わる闘争を面白くまた想像力に富んだやり方で見つめる、活力に満ちた新たな感覚を受け入れようとしているのかも知れない」と続けるに至ると、私は今こそ彼の心に秘められていることについてじっくり考えるときではないかと思うのである[1]。

地理〔学〕はサイードの著作の中に何度となく繰り返される主題であって、われわれ以外の学問分野の論評者たちは、空間や空間性について彼が深い関心を持っていることをすでに認識している。人類学からは、「…地理の創造、即ち象徴領域の認知と理解こそサイードの業績の中心である」とか、あるいは彼が抽象的にしか記していないときでさえ、「サイードは地理的心象 geographical imagery を用いることに心を奪われている」といった言葉が思い浮かぶ。社会学からは、彼は「時間に対するヨーロッパのモダニストたちの関心を、空間と空間性に関する同等の理解によって」補足する地理的イメージ a geographical imaginary の構成を解き明かしながら、「アイデンティティの地図作成術 cartography」を構築しようとしているのだと考えられている[2]。しかし、サイードの業績が、イギリス、フランス、そして、アメリカの帝国主義のなかに刻印された、権力と知と地理、これらの布置の変遷――この言い回しは私のものでなく彼のものなのだけれど――を図式化するもの[3]として読まれ得るものであるにもかかわらず、われわれの学問が依然として彼の目論見に対してこれまで全くと言っていいほど関心を払わずにきたということは事実なのである[4]。サイード自身、オリエンタリズムに対する、そして帝国主義の残した広範な文化に対する地理学の共犯関係について繰り返し指摘してきたが、われわれの学問のなかにこうした問題に言及することの出来る批判的史誌 a critical historiography が現れたのは、ごく最近のことに過ぎない[5]。この新たな研究の本質に批判的な刃を与えているものはと言えば、サイードと同じように、このような込み

* ブリティッシュコロンビア大学
** 同志社女子大学　*** 神戸大学

入った問題を、人里離れた埃まみれの古文書館に幽閉したままにしておかないという態度である。L・P・ハートレイ Hartley の言うように、「…過去とは異国であり、人々の振る舞いもまた異なるものである」と思っておけば、慰めにはなるかも知れない。しかし過去は、まったくもって疑わしいものでもあるのである。植民地主義的過去についての前提の多くは、今もなお新植民地主義的現在という異国に存在する。1990 年から 1991 年まで続いた湾岸戦争の際には、コンラッド Conrad がかつて称したような「好戦的地理学 Geography militant」が、例えばスミスの言う「初の GIS 戦争」のように、口に出すのもはばかられるほど明確なかたちで立ち現れてきたし、植民地主義の名の下、土地についての記述 earth-writing の学として、地理学にある種の地位と名誉が与えられたことは、アラブ世界を向こうに眺めながら真新しい会員証に名前を書き殴り、めでたく合同と相成った王立地理学会とイギリス地理学者協会の、至極俗物的でありながら尚且つ尋常ならざるほどの傲慢な態度を見ても明らかである[6]。

しかし地理学は、地図志向 the will-to-map を装いながらも、実のところ相当に権力志向 the will-to-power なのであり、それゆえ私は、この学問のもつ重大な歪みを強調しておきたいのである。具体的には、サイードの言う地理的想像力、その基礎知識、制度、含意、そして沈黙に関する建設的探求から始めてみたいと思っている。これから展開される私の議論は、「土地 land」と「領域 territory」の弁証法となるであろう。この 2 つの言葉は、政治的でありながら同時に文化的でもあり得るという多種多様な意味合いを帯びており、また、サイードはこの 2 語（あるいはこれらに極めて類似した語）を、恐らく地理学ではあまり馴染みのないやり方で用いている。とは言うものの彼の論の展開は、思うに大抵の場合、創造性溢れるものである。たしかにときには整合性を欠いたり、あるいは合成されたものであったりするけれども、実際のところ彼は、場所とアイデンティティの脱領域化 deterritorialized と再領域化 reterritorialized を提示するための一連の地図作成を行っているのである。植民地主義的且つ帝国主義的権力がつくり上げた理論上の鉄格子の中に引き込まれて、文字どおり、別のところへ置き換えられたり displaced、交替されたり replaced している景観と文化の姿を、彼は描き出し、これらの布置が、領有 appropriation と支配 domination と論争 contestation の場となるような道を照らし出している。これは太めの筆で塗り上げていくようなものではあるが、私はサイードの発する、オリエンタリズムや植民地主義、あるいは帝国主義といった略奪の歴史に対する問いかけと、今日のパレスチナ人の窮状に関する彼の著作が、同じ碑文刻印過程の表と裏の関係にあるということを示したいと考えている。これによって、権力と知と地理というものが、深刻なほどに物理的なかたちで、ともに引き出されてくるのである。ホミ・バーバ Homi Bhabha と同じように、サイードの政治的知の軌跡politicointellectual trajectory は、西洋側 the West Bank と左翼側 the Left Bank との間の運動として特徴づけられるのではないかと思う。私は、これら二つの側面について同時に考え、両者の鱗の如き重なり合いを記憶しておきたいと考えている。サイードの地理は、どこに由来するものなのかという、たった一つの問題について考察を進めていくために。

II パレスチナと強奪の政治学

解答の第 1 段階は、伝記的なものであり、また、彼はこう言って欲しくはないのだろうけれども、経験的なものである。エドワード・サイードは、1935 年、パレスチナ、西エルサレムのタルビヤ Talbiya に、すなわち、世界最古のキリスト教共同体の一つに生を受けた。幼少時代の彼は、紛れもなくイングランド国教会の伝統に則った訓育の下、人格形成されていった。彼は、エルサレムにあるイングランド国教会系のミッション・スクール、セント・ジョージズに通っており、洗礼も同教区内で受けている。サイードが生まれた当時、パレスチナはイギリス統治領となって 15 年を経過していた。第一次世界大戦が終結し、オスマン帝国が崩壊した後、国際連盟は、新たに独立を果たしたアラブ諸国を、イギリスもしくはフランスの委任統治下においた。というのも、第 22 条の文言では、これらの諸国は「…激動の現代世界情勢の下、未だ自らの手によって存続し得ない諸民族の居住する国々」と目される、とされていたからであった。1947 年秋、イギリスが、6 カ月以内に委任統治から撤退する旨の専横的最終声明を発表すると、パレスチナは動乱への道を辿ることとなった。その後、シオニズムの地下武装組織

ハガナおよび右翼系ユダヤ人地下組織イルグーンと、アラブ人との間に、領土をめぐる戦争が勃発し、この凄惨な戦いのさなか、60 万から 90 万のパレスチナ人がその居所を失うこととなった。その中に、サイードとその家族も含まれていたのである[7]。難民の大半は、エジプト、ヨルダン、ないしはレバノンに居を定めた。カイロへ移住したサイードは、ここでも、イギリス的教育機関の典型と言えるヴィクトリア・コレッジに進学し、その後の 1951 年、アメリカ合衆国へ渡って中等教育を終える。さらに彼は、プリンストン大学で英語と歴史を学んだ後、ハーヴァード大学で比較文学の博士号を取得する。ここで彼は、もう一人の放浪の才人、ジョセフ・コンラッド Joseph Conrad に関する論文を書き上げている[8]。

サイードが、後に、著作活動の大半を西洋の聖典 the western canon に対する批判的評価に充てることになるのは、至極当然のなりゆきである。というのも、私の素描からもおわかり頂けるように、その歴史=物語 history の幾分かは、彼自身の歴史=物語 history でもあるからである。事実、彼はグラムシ Gramsci にならい、「…すべての東洋人 Orientals の生涯においてかくまで強い力を及ぼし続けてきた文化」によって、東洋的主体 the Oriental subject としての自らの上に残された「無限の痕跡 infinity of traces」と彼自身称するものの目録をまとめあげているが[9]、また彼は旧宗主国の読者 metropolitan audience に対しても自らの文化史の再考を促しており、自らの「自己のものとする権利 ownership」を譲り渡し、その特権と前提を植民地主義と帝国主義に裏打ちされた活況を呈する商業に結びつけて考えてみるよう問いかけるのであった。

勿論、サイードは「航海へと乗り出す voyage in」にあたって、彼にとっての異文化という手荷物を置き忘れてきたわけではない。ただ、イギリスと合衆国が一方にあり、他方にパレスチナがあって、両者の隔たりによって生み出される軋轢が航海上の発見を大抵は問題含み problematic のものにしてしまうのである[10]。パレスチナを飛び立ったことが、いかなるかたちでサイードに影響しているのかという点について、私の口からほのめかすのは適切ではあるまい。「幼い頃のことについて思い起こせることの大半は」、と彼は記す。「直接には殆ど関係のない人々がいつまでも苦しみ続けている姿といった、朦朧とした少年時代の記憶である」。ひとたびパレスチナを後にすると、財産とカイロの治安によって、さらにそうした状況から絶縁されていったと、彼は認めている。彼は両親とともに、ザマレク島 the island of Zamalek に住み着いた。ここは「…実質的にヨーロッパの飛び領土で、われわれのような家族、すなわち、レヴァント地中海東部沿岸）の植民地に居住していた少数民族に属す者で、特権を得た人々の暮らすところであった」[11]。このことは、彼が伝記と歴史の接点を、父祖の地においてしか見出し得ないということを意味する。その手段は、叙述を積み重ねていくことであり、立ち退きを強いられたコミュニティの分散していく想像力のなかで上演される支離滅裂な一連の劇を示してみせること、あるいは、彼の表現を借りるなら、放浪する詩人の系譜をひく者のように、「…われわれの間を駆けめぐる取り返しのつかない過去の喪失という心の奥底に秘められた記憶」を語り継ぐということである。そして、この記憶だけが、ベネディクト・アンダーソン Benedict Anderson なら「想像の共同体 imagined community」[12]と称するであろうものの、言うなれば連なる島々の中に、あるいはその狭間に、彼のアイデンティティについて思索する道を与えてくれるのである。

こうした目論見は、贖罪 redemption と不完全性incompletion の苦渋の弁証法によって動かされるものである。したがって、パレスチナの人々の姿をとらえたジャン・モア Jean Mohr の写真や、1992 年に彼自身が「パレスチナ人のイスラエル Palestine-Israel」を訪れた際の感動的な記録などを、彼の中に（再）構築された伝記と歴史の感覚、つまりは彼の社会学的想像力が、粉砕されたパレスチナの人文地理に、いかに深く根ざしたものであるかということを認識することなく読むことは不可能なのである。

1 『最後の空も尽きた後に After the last sky』

ムーアとの共同作業は、彼にとってとりわけ啓発的な機会となっている。1983 年にサイードは、パレスチナ問題国際協議会 the International Conference on the Question of Palestine の顧問となった。彼は、（ジョン・バージャー John Berger との共作で既に相当な名声を博していた）モアに、パレスチナの民の姿を写真に収めるという仕事を委嘱し、その写真をジェノヴァ会議の会場へと至るエントランス・ホールに展示するよう、

後援母体である国連を説得した。憶測に過ぎないけれども、その意図は、「パレスチナ問題」が、直接に関わらない決まり文句によって解決が図られる何かしら抽象的な謎解きのようなものなどではなく、特定の場所の特定の人々が創り上げた意味の編み目の周りに紡ぎ出される（原義どおり）極めて現実的な問題であるということを、参加者に思い起こさせるところにあったものと思われる。モアが戻ったとき、彼とサイードは、展示に関してある条件が課されていることに気づく。それは、「写真を展示することは構わないが、それらに関する説明は、一切書き添えてはならない」との御達しであった。もし地理学が、まさに記述の一形態であるとしたら、文字どおり「大地の記述 earth-writing」の学であるとしたら、こうした禁止は、パレスチナの詩人、マフムード・ダルウィーシュ Mahmud Darwish がその初期の詩の一つに説明しているとおり、ぞっとするほど適切であると言わねばならない。

> われわれには言葉の国がある。話せ話せ、さすれば多々ある石のなかからその石の上に我が道を造らん。
> われわれには言葉の国がある。話せ話せ、さすればこの旅の終わりを知ることが出来るかも知れぬ。

ダーウィッシュは反逆の詩人の一人であったし、彼らの祖国でも強制的に「大地の記述」が禁止されていたことは驚くに値しない。彼らの多くは囚われの身となったり、放浪を強いられたりしたが、彼らは強奪に関わる苦悩を直に訴えかける詩を書き続けた。サイードは、モアとの共作のタイトルに、ダルウィーシュの別の詩を引いている。「最後の辺境も果てた後に私たちはどこに行けばよいのか」。「最後の空も尽きた後に鳥たちはどこを飛べばよいのか」。そして彼は遂に、テクスト中、モアの撮った写真に書き添えるのである。彼もまた、戦略的に打破するのための繋合詞 the strategic-subversive copula たる「大地の記述」を認めたのであった。単にパレスチナ人の地理と言えるようなものは不可能であるし、許されることすらないだろうが、サイードは、こんなことを言おうとしていたのではあるまいか。「われわれは『他者 other』であり対立者であり、言うなれば移住と出国の幾何学における汚点なのだ」[13]と。

『最後の空も尽きた後に』（邦訳：『パレスチナとは何か』）のなかで、サイードは、繰り返し、領土としての地理と土地としての地理との緊張関係に苦悶する

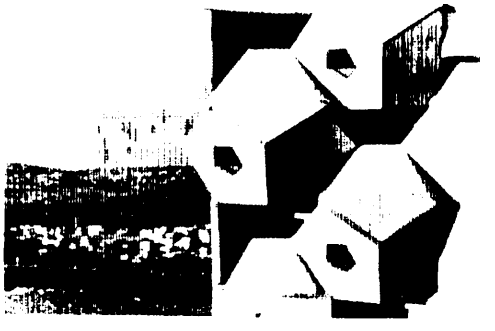

図１　領土から大地へ：西岸のイスラエル人集落とアラブ人村落。1979 年（写真家ジャン・モアの親切な許可により転載）

パレスチナへと立ち返る。このことは、イスラエル人が定住する西岸の平面的な幾何学的配置と、パレスチナ人の村の有機的な根づき方 the organic rootedness（図1）との間を移動するモアの画像 3 部作に映し出されているし、サイード自身のより一般的な回想の中にも再度現れている。

> 地理的な関係の安定性と土地の永続性――こうしたものは、私の生活から、またあらゆるパレスチナ人の生活から、完全に消滅してしまった。仮に私たちが、国境で足止めされなくとも、新しいキャンプに収容されなくとも、再入国や居住を許可されようとも、移動の自由を妨げられなくとも、同じことだ。私たちの土地の多くは奪い取られており、私たちの生活は恣意的な干渉を受け、私たちの声は互いに届かぬよう予め工作されており、私たちのアイデンティティは、純粋な行政〔投薬〕という臨床的な隠語 the clinical jargon によって毒気を消された、優勢な軍事勢力が有する居心地の悪い環境の中の孤立した小さな安全地帯に、戦々恐々とした状態のまま閉じ込められている。
>
> かくしてパレスチナ人の生活は、分散し、連続性を失い、その特徴をなすものは、中断ないし局所化された空間の作為的かつ無理強いされた配列、掻き乱された時間の転地と共時化されない律動といったところになる。（中略）家庭・出生地・学校・成熟といった直線が成り立たないところでは、あらゆる出来事は偶発事であり、あらゆる進歩は逸脱であり、あらゆる居住は離郷なのだ。

ならば、いかにして地理がパキスタン人にとって適切なものたり得るのか。いかにすればあの「傷」が、統治された空間の分析的な格子の裂け目が、その枠となる地理を破砕し得るのか。オリエンタリズムの覇権に関わる言説に帰する、物語性 narrativity と体系性 systematicity の歪んだ反転の中にあって、この論文におけるサイードの反応は、パレスチナ人の存在を地図の上に再び刻み込むために、種々雑多で、断続的、断片的な形態を生かす表象の空間 a space of representation に賛同を示すものであった[14]。

しかし、このような地理の記述を行うのは、二重に困難なことである。ごく直接的には、モアの写真に自らのテクストを綴じ込むというサイードの試みは、彼自身のパレスチナからの強制退去によって混同されてしまっている。実際彼は、ハイデッガー Heidegger がその語を用いたのと同じような落胆の感覚をもって、パレスチナという枠組みを作ることを余儀なくされており、言うなれば鏡を通り抜けようともがかなければならなくなっているのである。なぜなら彼は、モアにつき従おうとすることか、あるいは、自分自身の足跡 wake を追おうとしていることかの、いずれかによって行く手を妨げられているのである。「撮影された現実の人々に私の手が届くわけではない。すべては私に代わって彼らを見たヨーロッパ人の写真家の仲介のおかげである」[15]。無論、サイードのおかれている境遇は極めて個人的なものであるが、この点こそが問題なのである。他の共感を覚える論客たちは西岸に赴き、国境を越えて、キャンプや都市部の国を追われた人々のコミュニティを訪ねることが出来たし、パレスチナ人と言葉を交わすことも許されていた。例えば、イギリス人のテレビ・ジャーナリスト、ジョナサン・ディンブルビー Jonathan Dimbleby と、写真家、ドナルド・マッカリン Donald McCullin が行った同様の共同調査は、7 年も前に出版されており、国を強奪された人々の表情そして声が、まさに紙面の上で飛び跳ねている。画像とテクストの類希な融合によって、パレスチナの窮状に関する直接的で、威厳高い情熱溢れる叙述が生み出されており、サイードの苦悶に満ちた散文を特徴づける、何者かを介した追想や思索などは微塵も見当たらないのである[16]。大抵の場合、サイードが成し得ることは、ムーアの画像に対して一連のまことしやかな注釈を加えることだけである。彼が文字を刻み込むのは、先述したとおり、叙述を積み重ねていく瞬間なのだが、こうした記憶の断片と、ムーアのレンズを通して捕らえられた人々と場所の特異性との間には、常に隔たりがある。その結果が、奇妙なまでに抽象化され、当惑するほどに一般化された一連の論考なのである。しかし、『最後の空を追われて』のもつ辛辣な力は、紛れもなく、この主体の声から強制的に引き離されたというところに起因するものである。

私がたった今引用した一文、「撮影された現実の人々に私の手が届くわけではない。すべては私に代わって彼らを見たヨーロッパ人の写真家の仲介のおかげである」に秘められた悲しみは、やがて調停の段階と、時間と空間の転移という更に大きな渦になっていく。例えばここに、サイードが、野菜を詰める難民労働者の写真について残した短評がある。

> ロンドンやパリで昔と同じヤーファー産のオレンジやガザ産の野菜――私が若き日を過ごしたバヤーラート（「果樹園」）や畑で育ったのだが、今ではイスラエルの輸出会

社によって出荷されている――を眼にする時、私たちがかつて知っていた物の漠然とした豊かな*存在感*と、ヨーロッパの人々の需要に応えるための産品の組織だった輸出ということとの隔たりは、無愛想な政治的メッセージとして私を愕然とさせる。土地と農民とは、農作業を通して結びつけられ、その作物は、常に他の人々にとって何かを意味する、つまり、他所で消費されることを宿命づけられてきたように思われる。こうした観察がそれなりの説得力を持つのは、カルメル山の名が記された箱と丹念に包装された茄子が、パレスチナの茫漠と広がる肥沃な土地と辛抱強い人間の労働を支配する権力の記章だからというだけではない。ここにいる私と、向こうの現実性との断絶が、パレスチナにまつわる私の今や弱まりつつある記憶と経験よりも遥かに否定し難いものとなってしまったからでもあるのだ[17]。

この文章は、一つの有機的統一が断裂する様を示している。サイードの慎重な散文の中で、自らの土地を耕すパレスチナ人の農夫たちの姿によって表象されるアイデンティティや土地に根ざしていることrootedness の鱗の如き深い重なり合い――これ自体オリエンタリストの言説にある無時性 timelessness の*盗用détournement* である――は、引き裂かれてしまっている。しかし、このことは、商品資本主義 commodity capitalism の時空圧縮 the time-space compression といったもの以上のものを問題にしているのであり、デイヴィド・ハーヴェイ David Harvey がかつて述べていたように、自分の朝食がどこから運ばれてきたものであるのか考えてみる契機以上のものである。というのもサイードは視点を反転させているからである。事実、彼はこう問うているのだ。「パレスチナ人は何処へ行ってしまったのか」[18]。

45 年の歳月を経てようやく実現したパレスチナ訪問について記した論文のなかで、自らが発したこの問いにサイードは答えている。カナダ在住のいとこが、記憶を辿りながらサイードの生まれ育った村の地図を手に 2 時間探し回った後、サイードは、今ではキリスト教原理主義組織のものとなっている我が家にたどり着くこととなった。

何にもまして、私が立ち入らなかった、いや立ち入ることの出来なかったその家こそが、日除けのかかった窓の向こう側から私を見つめていた歴史というものの不気味とも言える終わりを象徴していたのだ。広大な入り江を前にして、自分には越えることが出来ないと分かった。私の知っていたパレスチナは消え去っていた。

これは、大人になって子供時代の世界に帰ってみたら、時の移ろいとともにすべてが変わっていた、という自伝の類にありがちな話ではない。むしろ、場所と景観と領土に刻印され、折り重なる記憶のもの悲しさである。家族とともに海岸沿いに車を走らせたとき、サイードは、フットボール場であれ、果樹園や公園であれ、あらゆるオープン・スペースが、有刺鉄線によって囲まれていることに気づく。そして、この分割と囲い込みの感覚が、歴史は終わり、しまい込まれてどこか別のところに現れようとしているという感覚を彼に強く抱かせたのである。彼はガザへと向かい、夜間は施錠されている門を通り抜けて、6 万 5 千人の難民が暮らすヤバラヤ Jabalaya キャンプを訪れた。「舗装もなく、穴だらけで、混沌とした通りに群がる無数の子供たちの瞳には、輝きが溢れていた。それは、大人たちの顔に凍りつく悲しみと、終わることのない苦悩の表情とは、まったく相容れないものであった」。この悲しみと苦悩は、土地そのものの顔全面に記されていた。サイードにとって、同じように数多くの同胞たちにとって、パレスチナ人の苦境の中心にあるものこそ、まさに地理なのであった[19]。

こうした物に対する固執に関しては、いずれ更に掘り下げる機会をもつことにするが、このような状況下にあって、サイードがかくもグラムシを賞賛していることは驚くに値しない。彼の説明によれば、グラムシは

地理学の用語に依って思索した人物で、その『獄中ノート』は近代を記す地図の一種である。近代の歴史を示すものではなく、軍用地図のように、彼の記録は、実にあらゆるものを定位 place させようとしている…ここには常に領土をめぐる何がしかの闘争がつきまとう[20]。

領土 territory については、その語源の問題も片づいてはいない。その語根としては、*terra*（大地）や、*terrere*（脅かす）などがあるため、*territorium* などは、「…人々が恐れおののいて立ち去る場所」の意味を持つ[21]。考古学、歴史学、いずれの記録を紐解いても、呪文でもかけられているかのような恐ろしさや、形相すら変えてしまいそうな恐怖感によって引き起こされる、転地=置換 displacements の例は枚挙に暇がないが、サイードがもっとも関心を払っているのは、領土というもの

の極めて近代的な屈曲というものである。近代を記した地図の上で、領土は、フーコー Foucault が法的政治的領野 juridicopolitical field と呼んでいたものを暗示しており、したがって、サイードのパレスチナに関する著作が、「…純然たる統治という分析的な隠語によって不要なものを取り除かれた」、分割と囲い込みのイメージに満ちているのは決して偶然などではなく、フーコーの完全な模倣なのである。領土に秘められたこうした意味合いは、権力と知と地理の結合した重要課題をつくり上げており、これらこそ、サイード自身が、明らかにし、問いかけ、と順を追って、転地 displace を図ろうと目論んでいることなのである。

2 転覆の群島 The subversive archipelago

当初掲げていた問いに対する二つ目の解答を始める方策の一つとして、つまり、サイードの地理もまた文化・社会理論の空間化 spatialization に由来するものであるということを示すために、グラムシとフーコーに登場願った。しかし、この知の系譜が、何かサイードの伝記と歴史との交差から切り離された別個のものだと捉えて欲しくはない。彼は、彼やその他の思想家質の考えを読解し再生 rework するが、それらはパレスチナをめぐる闘争への参与ならびにパレスチナ問題への継続的参入と切り離すことはできないのである[22]。私は、この知的目論見の根を、地名学的なショートハンド a toponymic shorthand として、とりあえず左岸に据えているが、私は、戦後フランスの知的文化と一般化された左翼の政治的企図の両者に直接依拠するサイードの著作のなかから 2 本の理論の糸を解きほぐしてみたいのである。ここで、サイードの借用の仕方は、直接的ではなく、ある意味でリゾーム的 rhizomatic であることを言っておいた方がよかろう。つまり、それらは、再生されたもの reworkings、あるいは接ぎ木 graftings であり、概念上は、彼が別のところで「音楽的エラボレーション（練り上げ）」と記していたものに相当するものである。2 本の糸が相当に対立したものであることが分かってきているのは、恐らくこのためである。批評家の中にはサイードの著作にポスト構造主義の痕跡を見いだして困惑している者もいれば、彼が史的唯物論から遠ざかっていることに異議を唱える者もいる。しかし、サイードの著作に関して彼らは皆、頑ななまでに慣習的な（直線的な）読み方をしているのだが、私に言わせれば、彼の業績に秘められた力は、彼の深い空間的形象化 spatial figuration の感覚、つまり、不調和な諸理論の伝統を創造性溢れるやり方で並置する感覚に起因するものである。ピーター・ハルム Peter Hulme は、サイードの業績を「転覆的群島」、すなわち、分散していながらも関連し合い、また同時に植民地主義的実践に問いを発し、「大陸的理論continental theory」[23]の銘板を破砕する一連の干渉のように表現しているが、この記述の中には、私の心に秘められていることの幾分かが捉えられている。

ハルムが言うには、フーコーとマルクスを結合することによって、上のようなことが成り立つのだが（こうした接合はありそうにないと思えはするけれど）、これは純然たる理論的企図ではない。私はとりわけ、粉砕されたパレスチナの最後の宣告の響きと、人々を包み込み分割している政治=軍隊化 politicomiliterized された表層に亀裂を生じさせようとするサイードの勇気ある試みを、いや少なくとも、心象地理 imaginative geography と空間の表象 representations of space を、失わないようにしたいと願っている。私もハルムのように、同じ知的結合について考察してみたいのだが、これを抽象的なかたちでやりたくはない。私がこうした主張をするのは、サイードの目論見に対するもっとも一般的な反論の一つが、植民地主義と帝国主義の規範的文化と極めて直接的に関連する近年の論考の中で、彼がテクスト主義 textualism に陥っているというものがあるからである。これは、ニール・スミス Neil Smith の言葉に、ごく簡潔に、そしてまた極めて示唆に富んだかたちで表現されている。

> サイードの近年の著作の多くには、彼の文学的なテクストから掘り起こされた想像上の地理 the imagined geography と、それに彼が再度絡めていこうとしている歴史地理 the historical geography との間に、重大な矛盾点が残されている。つまり、後者は、決して前者から離れて、あるいはその中に入り込んで、充分に明確なかたちをとるということがないのである…サイードには地理学的両義性 a geographical ambivalence がある。地理の抽象性が自覚されるまでは、その地理への祈りが、サイードのテクスチュアリティ textuality に、活気に満ちた政治的基盤をもたらしているように思える[24]。

以下の大部分は、この問いかけに関する考察である。私は、パレスチナ問題をめぐるサイードの介入の中に

非常に明確に示される物質性を強調すべく、彼の主題 thematics のいくつかを再生させてみようと思う。

私は自分自身の立場を慎重に選んできたが、さらに二つの限定 qualifications をつけておく必要がある。まずは、議論を進めていく上で私が用いる、ナポレオンの『エジプト誌 Description de l'Égypte』やヴェルディのオペラ『アイーダ Aida』のカイロ初演、といったヴィネットが、サイードを、通常移動するよりも遥かに遠くまで書斎から連れ出す。これらのテクストに関する議論の中で、サイードは、植民地主義の物質文化と、その不調和なる景観へと更に深く潜り込んで行く。大国フランスの文化にとって、この『エジプト誌』はエジプトの軍事的支配に関する極めて重要な遺産の一つである。しかし、サイードも強調しているように、そこから生み出されるものは、同時にテクスト化 textualization と領有=奪用の間には密接な関係があることを明らかにしている。フランス軍に従事した学者や科学者たちの仕事は、理性の燈火によってのみならず、砲弾の炎によって火を灯されたものであり、サイードは、テクスチュアルな暴力から迸る血しぶきが、物理的暴力へと連なっていく、このあり方について力説しているのである [25]。同様に、『アイーダ』に関する論文は、具体性から切り離されたスコアと台本のみならず、演出と演技の物理的な特長、つまり、出来事 event としての文化にも言及するものであり、彼の言う高尚文化の「世界化 worlding」は、オペラ・ハウスの舞台それ自体に及ぼされる植民地主義的権力の騒々しいばかりの登場を通して、ここにおいて進行するのである [26]。ただ、もしこれら二つの状況の物質性 materialities が、サイードの著作には希なものであるとしたら、それらは、より広範な物事の体系にあっては、殆ど例外的なものとは言えまい。オリエンタリズムのテクスト的実践は、いかなる批判的探求においてもその回復が戦略的重要性をもつものとなる、身体性 corporealities と物体性 physicalities をその特質とする [27]。同じように、演技は、サイードも言うように、当然「…日常を超越した極端な機会」である。ヴェルディのオペラの第 1 幕は、エジプトにおいてはとりわけ、紛れもなく普通とは言い難いものであった。しかし、文化は、それ自体演出と演技なのであり、その頑ななまでの日常性 everydayness は、オリエンタリズムの論評の中に組み入れられなければならない。サイードも記すように、われわれは、「帝国主義のミクロ物理学 micro-physics」を構成するものとして、「…日常生活の力学における日常的な権力の行使」というものを心に留めておかなければならない [28]。

次に、私が行う事例研究はいずれもエジプトを舞台としている。しかしながら、多くの批評とは異なり、私は、サイードの『オリエンタリズム』論のもつ強さの一つは、いわゆる「中東」に基盤を置いているという点にあると考えている。逆に、『文化と帝国主義』にいたるまでに集積された責務への高圧的な評価に秘められた本質的な弱さの一つは、その地理的拡散にあると考える。サイードの『アイーダ』のカイロ初演に関する論考が、この本の中で最も輝かしいものの一つであることは、偶然ではない。この点を誤解しないで欲しい。私は、オリエンタリズムの言説が、特定の地域に限られた通り一遍の知識であると述べようとしているのでもなければ、その権力と知と空間性の布置が、（重要であることの多い）再生なしに、その他の植民地主義的あるいは新植民地主義的状況へと転化され得ると考えているわけでもない。まずもって重要なのは、*ただ単に tout court* 植民地的言説の同義語となってしまうような、常軌を逸した exorbitation オリエンタリズムに抗することである。別の場所における別の植民地主義的権力の実践について教えてくれる言説と、オリエンタリズムとを結びつける、同調性 resonances、連接性 connectivities、体制性 systematicities というものがあり、また、オリエンタリズムを、実際にある別の植民地体制から差異化 differentiate する屈折 inflections と補遺 supplements と逆転 reversals もある。中東というものを提示するために用いられた心象地理 the imaginative geographies は、例えば、南アジア、サハラ砂漠周辺の sub-Saharan アフリカ、あるいは、南アメリカなどを提示するために用いられるものとは異なっていたし、それらの表象の力、つまり、植民地主義的実践の考案と伝播と合法化は、本国の人々より多くの人々によって保証されていた [29]。サイードが繰り返し強調しているように、植民地主義的諸言説は、単なるヨーロッパ人の儚い幻想などではなく、基盤を持ち、必要とされたものであった。さらに、私が意図的にこの語を、全体を通して複数形で記してきたこともつけ加えておいた方がよかろう。サイードは、オリエンタリズムを、リサ・ロウ Lisa Lowe が主張するような矛

盾に満ちた広範な領野としては取り扱っていないし、現実の問題は、いかなる推論上の全体化よりも、矛盾の欠如という点にあるのだ[30]が、彼の綴る著作は、決して均質なものではない。彼の論考の中では、フローベールはネルヴァルではないし、マシニョンはルナンではなく、ロレンスはバートンではないのである。

しかし、もし差別的な地理 a discriminating geography が声高に求められるのなら、確定的なものもまた必要とされるということである。こうした理由から、サイード同様、私は、19 世紀ヨーロッパの学者や芸術が生み出したエジプトの心象地理の幾つかに関する考察を通して、議論を進めてみたいと思う。サイードにとって第一の関心事である、啓蒙の時代を経たヨーロッパの地理的心象の中で、エジプトは、ヨーロッパ、アジア、そしてアフリカの軸となる位置を占めていた。そこはまた同時に、古代文明発祥の地でもあり、旧約聖書を生み出した景観 the originary landscapes の一つでもあったし、さらには、インドや極東への政治的・経済的玄関口、また、「アフリカの核心 heart of Africa」に至る主要経路でもあった。エジプトを、心理地理的なもの a psychogeographical を追求したあの「中東」に位置する識閾 a liminal zone に仕立て上げているこれらの交差点は、「近東」に想定される親近感と近接性から「極東」の危機感と遠隔性に至るまで、ヨーロッパ的仮想 the European imaginary の中にある。ジョン・バレル John Barrell は次のように述べている。「中東」は、このように「…許される可能性のあるものと、いかなる犠牲を払おうとも排斥されなければならないものの間にある、一種の移動防壁ないしは緩衝装置であった」[31]。しかし、この浸透膜 the membrane が無くなることはない。常に曖昧で、矛盾に満ちたものなのである。ヨーロッパの心象地理というスクリーンの上に一連の二項対立を映し出そうと、あらゆる試みが行われたにも関わらず、「エジプト」を「単なる他者として」[32]措定することは出来なかったのである。

Ⅲ 地理を想像する Imag(in)ing geography

『オリエンタリズム』の中でサイードは、これらの心象地理を、おびただしい数の権力と知と地理がつくり上げる三角測量として扱っており、彼の記述の概念構成 the conceptual architecture は、ミシェル・フーコー Michel Foucault に依拠している。サイードのフーコーへの関わり方は、無批判的でも不変のものでもないが、記述全般に渡って、彼はフーコーの空間感覚の鋭さ spatial sensibility に対して敬意を表している。「フーコーのものの見方は」本質的に「空間的 spatial」であると、彼は述べる。そして、私が示そうと考えているのと同じように、この「ものの見方」がまた、サイードの地理をも形作っているのである[33]。

しかし、そうしながら私は、問題を二つに分類しようと思う。まず第一に、論評者たちの中には、サイードのヒューマニズムをフーコーの反ヒューマニズムに結びつけることが困難であるという点に固執して、このことが、『オリエンタリズム』のまさに中心に当たる部分で、概念上の非一貫性 a conceptual incoherence を、あるいは、よくても揺らぎ vacilation を引き起こしていると主張する者がいる。このジレンマは、主にサイードの批判的実践の価値体系、とりわけ、知的責任に対する確固たる参与 unwavering commitment によってもたらされた産物であると私は考えている。しかし、この種の不平に特徴的なのは、フーコー自身が後に、個の価値体系 an ethics of the self へと移行していったことと並行する問題 a parallel problem の再来という点が看過されていることである。何れの場合も、理論的浄化 theoretical purification によって苦境を打破することは出来ない[34]。第二に、サイードに対する最も辛口の批評家の一人は、彼のオリエンタリズムの提示が、超歴史主義的 suprahistorical であるがゆえに、根本的にフーコー的ではない non-Foucauldian と述べる。アイジャーズ・アフマード Aijaz Ahmad は、サイードがオリエンタリズムを、継ぎ目のない統一的なヨーロッパ的アイデンティティと思想の歴史の中へ召喚していると主張する。そしてこの歴史は、フーコー的歴史が古代ギリシアと 19 世紀ヨーロッパとの間に措定していたあらゆる非連続性に、何の妨げもなく解釈の架け橋をかけていく。この反論が経験的なものなのか、つまり、アフマードはサイードが想定している連続性を否定するのか、あるいは、サイードが知的信仰主義intellectual fideism から旅立ってしまったことで意気消沈しているのか、私にははっきり分からない[35]。いずれにせよこれは、驚くほど雑な読み方である。なぜなら、サイードの分析力が、オリエンタリズムの明白な近代的編制 formation へと向けられていることは間違いな

いからである。数多くの著作家たちが提示してきたように、「東洋を他化すること Othering the Orient」に関して、ヨーロッパの思想には長い歴史がある。そして、サイードもまた例外ではない。実際、彼は、ヨーロッパが、東洋のマリオネットに対する人形使いとして自己を規定してきた歴史の古さを論証するため、アイソキュロス Aeschylus とエウリピデス Euripides に登場願っている。しかし、連続性に関する、つまり、歴史という回廊のなかに押し込められたオリエンタリズムの澱んだ空気に関する記述と、鎧戸を開いて、様々な時と場所で現状を妨げる忌まわしい風を取り込む記述のいずれかを選ばねばならない理由は、私には見当たらない。サイードもまた然りである。彼は、曖昧なところなど微塵も見当たらぬほど明白に、18 世紀末におけるフランスのエジプト支配が、権力と知と地理の明らかに*近代的な*布置 constellation の始まりであったと、つまり、それが「…近代的オリエンタリズムの可能性を拓く経験であった」[36]と論じている。

問題を二つに分類することで、私は、それらがオリエンタリズムやその空間の表象と無関係であると言おうとしているわけではない。私が描きたいのは、フーコーとサイードの心象地理の、すなわち、彼らの「空間的なものの見方 spatial view of things」の関連性である。なぜなら、これらの並行関係こそ、いかなる分離状態より遥かに重要だと思うからである。

1 空間の詩学と政治学 The poetics and politics of space

サイードはまず一般的な主張から始める。レヴィ=ストロース Lévi-Strauss が「具体の科学 the science of the concrete」と称していたもの、つまりは、サイードが「客体とアイデンティティの経済 the economy of objects and identities」と称するものは、秩序立てられ組織化され差異化された帰属する*場所* assignment of place に依っている。この空間的隠喩 spatial metaphoric は、「…人の心のなかに『われわれのもの』である慣れ親しんだ空間と、『われわれのもの』の向こうに『彼らのもの』である馴染みのない空間を描く普遍的実践」[37]を経た、アイデンティティ捏造の手段であると、サイードは言う。サイードは、文字どおりの意味でこう述べている。バシュラール Bachelard に倣って、彼はこの実践を空間の詩学 poetics of space として表記している。

> 家——隅っことか廊下、地下室、部屋など——の客観的空間は、そこに詩的に賦与される性質に比べれば、さして重要なものではない。そして、そこで詩的に賦与される性質とは、通常われわれが名付けたり感じたり出来る想像上の価値、あるいは比喩的な価値を帯びた性質のことであり、それゆえに家は、お化け屋敷になったり、家庭的であったり、監獄のようだったり、魔法にかかったように見えたりするのである。つまり、空間は一種の詩的プロセスによって、感情的な意味あい、あるいは合理的な意味あいをすらもつようになり、その結果として、空っぽで名付けようもないひろがりがわれわれにとって意味あるものに変ずるのである[38]。

これがあまりにも抽象的であると思われるなら、サイードがタルビヤのかつての我が家に立ち戻ったときのことを思い浮かべて頂ければよかろう。この場所は「温かい家庭」から「牢獄のようなところ」へと、心象上の imaginatively 変貌を遂げており、アイデンティティの地勢図 topography のひとつが、別のものに置き換わってしまっている。しかし、注目しておかなければならないのは、これが、心象上の転換 an imaginative transformation であり、捏造と詩作のプロセスであるということ、したがって、この我が家への接近において、サイードは事実上、心象地理を脱自然化させているということである。

にもかかわらず、こうした心象地理の生産は、一般化された実践なのである。サイードは次のように主張する。「…アイデンティティの確立とは、反対側と『他者』を作り上げることでもあり」、また「…あらゆる社会にあって個人個人と諸制度を包摂する競合状況として立ち現れるものである」[39]。この種の見解は、幾つかの方向へと展開され得る。そのひとつに先験的記録 the transcendental register を深めていく試みがある。例えば、ヘルガ・ガイア=ライアン Helga Geyer-Ryan は、サイードの議論をラカン派の Lacanian 言語に再編成 reformulate している。彼女は、空間の詩学を*空間の精神分析 psychoanalytics of space* へと転換し、「…家の使用価値へと刻み込まれる情緒的価値 the affective value」は、「…母親の子宮と身体に関する無意識の記憶と、幼児期の身体的想像 the bodily imaginations」に起因するものであり、言い換えれば、家が「身体の似像=分身 the body's double」になるのだと言う。彼女は、

都市との関連でも同じような見解を示しており、さらに敷衍したかたちで、「…空間、地図上に明確な等値線を記された身体、地政学的諸項目の疑似有機的合成物としての」国家は、「同様の想像力 imaginary power を吹き込まれているようである」と提言している。彼女の議論は、身体と空間との間にある似像のこのような重層構造が、想像的象徴的記録 the imaginary and symbolic registers の中に不安定なかたちで構成されたものではあるけれども、アイデンティティの感覚を形成しているが、この感覚は、国を追われた者と国を去る者の転移 the *dis*placements of exile and emigration によって傷つきやすく、実際には粉砕されてもいるというものである[40]。

不安や欲望や幻想といったものが心象地理の生産へと入り込んでくる筋道を理解することは必須であり、サイードがこれらの欲望の地勢図 topographies に注意を払わなかったことは、オリエンタリズムに関する彼の記述の中でも際だった遺漏である[41]。しかし、私は、ガイア=ライアン（およびその他の人々）が記す先験的主張 the transcendental claims と、オリエンタリズム特有の布置によって場所の上に置かれた身体と空間の一致という歴史・地理的種別性 the historicogeographical specificity との間には、緊張関係が維持されなければならないと考えている。

別の面から言うと、既に示したように、サイード自身、歴史的議論に比して先験的議論に関心を払っていないし、空間の政治学 the politics of space に比した場合、空間の精神分析に対する関心の度合いはさらに低いものであった。もし空間の詩学を通じたアイデンティティの構成が一般化された実践であったとしても、彼はそれもまた「競合の場」なのであり、決定的な権力様態とは不可分であることを完全に解き明かす。このため、サイードは、植民地主義的言説の分析に最適なモデルは、大半の精神分析理論が影響を被っているところの言語学的なものではなく、戦略的ないしは「地政学的」なものであると論じる[42]。それゆえ彼は、二度目の接近の際、「…シニフィアン（意味するもの）が場所を占拠する力」に、すなわち権力=知 power-knowledge の広範な体制内で各個人が特定の場所に帰属していることに、関心を引きつけるべく、フーコー的言語によって空間の詩学を再定式化するのである。それはあたかも、「フーコーの監獄に関する体系 carceral system とオリエンタリズムの間の並行関係は誰の目にも明らかである」（邦訳 363 頁）[43]と主張しているかのようにも思えるものである。

2 視覚制度 Scopic regimes

私は、フーコーの「監獄システム」とサイードの『オリエンタリズム』の並行関係を権力と知と地理、この三者の地図の上で３つの部分に分けて描写したみたいと考えている。

a 区分 Division：まず、フーコー、サイード両者ともに、排他的地理の広範な構築について記述している。サイードは、フーコーの業績の核心には「…他者性の感情を伝達する多様に具現化した観念」、すなわちフーコーが記述していることのみならず、その記述の仕方までをも形成する観念があり、ゆえに「…彼の記述には気を抜ける箇所 being at home などない」のだと述べる[44]。フーコーの中心的な主張の一つは、社会というものが、分割と排斥と対抗のシステムによって実行される規範化を促す一連の判断を通して、言説的に構成されているというものである。彼は、狂気、監獄と罰、そして性の歴史のなかに、その痕跡を辿る。これらの物語はすべて、その理性の軌道を西洋に限定されているけれども、『狂気の歴史 *Histoire de la folie*』の初版序文で、フーコーは次のような示唆をしている。

> 西洋的*理性 ratio* の普遍性のうちには、東洋というあの分割 divide がふくまれている。すなわち起源として考えられている東洋、郷愁と回帰の約束とが生まれ出る、目のくらむような地点として夢想されている東洋、植民地主義の西洋の理性の犠牲になっているけれども、つねに限界の地であるために無限に近寄りがたい東洋。すなわち端緒の闇夜——西洋がそこで形成され、そこに西洋が分割線を引いてしまっている端緒の闇夜たる東洋は、西洋にとっては西洋ならざるものである。よしんば西洋が自らの原初的な真理であるものを東洋に探求し求めなければならぬとしても、西洋の形成の流れにそって、東洋と西洋のこの大いなる分割の歴史を書き、この分割をその連続と交換において追跡し、しかも、それがその悲劇的な宗教性の点でも現れるようにしなければならぬだろう[45]。

フーコー自身の東洋に対する関与は、極めて明確なかたちとしては、『言葉と物 *The order of things*』の最初の頁に記された「中国の百科事典 Chinese encyclopae-

dia」や、異種混在の場 heterotopia としての「東洋の庭園 oriental garden」に関する小論などに見られるが、常に周縁的な注釈であった。何れの場合にも、彼は東洋を、われわれにとっての事物の秩序や客体とアイデンティティの有機的統一といった西洋的幾何 occidental geometories を可能にする、根本的に異なった空間、西洋的幾何学の崩壊として描いている[46]。

しかし、彼は決してこうした観念を詳細に渡って展開させていくことはなかった。『オリエンタリズム』は、フーコーの言う西洋と東洋との「大区分」に関する未だ記されない歴史を再構築しようとするサイードの試みと読めるように思う。このように彼の目論見の幾分かは、〔以下のような〕オリエンタリズムの心象地理の主要な十字線を型どる諸細胞 cells の地図化であった。

「西洋」/「同者」	*「東洋」/「他者」*
合理的	非合理的
歴史的	恒久的
男性的	女性的

『オリエンタリズム』の中でサイードは、これらの二項対立を非常に不均衡なかたちで扱っている。とりわけ彼は、東洋の性別化 sexualization と性愛化eroticization について、驚くほど殆ど語っていない[47]。近年の著作で彼は、対極にあるすべてのものを分断し、転移しようとしている。彼は明言する。「恐らく幾分かは帝国というもののために、あらゆる文化は互いが互いのうちに巻き込まれることとなった。単一にして純粋なものなど一つもない。すべては雑種的であり異種混交的であるのだ」[48]。しかし、このような硬直した図式の中に各二項 couplets を提示することによって、オリエンタリズムの言説が、「東洋なるもの」を本質化するばかりでなく、「西洋なるもの」をも本質化しているということがわかる。そういうわけで、彼に対する多くの批評とは逆に、私は、サイードが明らかにしている、東洋そして西洋の戦略的本質主義は、純粋に彼の思いつき artifice の産物ではなく、むしろオリエンタリズム自身の構成的機能 constitutive function によるものだと考えている。

サイードは、これらの区分を普遍化と差異化を志向する権力の網の目に結びつけ、そうしながらフーコー独自の論を敷衍していく。彼は、フーコーが「…歴史はフランス語圏という均質な領域ではなく、一様でない経済、社会、イデオロギーの複雑な相互作用であるという事実に関心を示していないようである」ことを嘆く。批評家の中には、フーコーの自民族中心主義は決して考慮されていないわけではなく、ただ、彼の業績を、サイードが説くような「ヨーロッパとそれ以外の世界の諸地域との関係」を包摂した「更に大きな版図 picture」の中に位置づけることが困難だったのだと主張する者もいる。しかし、サイードは、「言説と規律という発想がどの程度積極的にヨーロッパ的なものであるのか」のみならず、「多量な細部（それに人間存在）を援用するための規律を用いることに加えて、規律がいかにして非ヨーロッパ世界全体のほとんどを管理し、研究し、再建し（そのあとで占有し、支配し、搾取する）ためにも用いられたのか」[49]ということをも示そうと決意しているのである。

b 細部 Detail：二番目に、これらの考察を充分に踏まえた上で、フーコーとサイードは、このような区分の、そして「言説と規律=訓練」の歴史は同時に細部 detail の歴史でもあると提言する。フーコーは、それを再構築することによって、われわれは 18 世紀末に、「細部の世界」と自ら称するものを思い描き、その組織化に取りかかったナポレオンに行き着くと論じる。「彼は、自分のまわりに一つの権力装置を配備したいと思い、自分が統治していた国家のごく些細な出来事をも知覚出来るようにしたいと考えていた」[50]。サイードにとっても、オリエンタリズムの力は、細部の規律=訓練としての組織化 constitution に由来するものであった。彼は言う。「何にもまして、オリエンタリズムは、細部の規律=訓練として、実質的には細部の理論として存在している。それによって、東洋的な生き方の極めて細かな諸局面すべては、オリエンタリズムが体現してきた東洋的本質を証すこととなる。すなわち、オリエンタリズムには、東洋の上に君臨していた身分の高い人々 the eminence と権力と独善的権威 the affirmative authority があったということを示すのである」。彼もまたナポレオンに、なかでもその権威の下に綴られた『エジプト誌』に、特別な重要性を見ている。ディドロ Diderot の『百科全書 Encyclopédie』に描かれる 18 世紀フランスの分析的記述のなかに散りばめられたものと同様の視覚的戦略を参照しながら、

『エジプト誌』は、先例のない、一国家の他国によるテクスト的領有 textual appropriation を提言している。実際のところ、アンドリュー・マーティン Andrew Martin が「テクスチュアルな帝国 a textual empire」と称するようなものを構成しているのである。そこでは、「…一国の服従というものが聖書という要塞によって補われることとなっていた」[51]。遠征軍の撤退は、こうした切なる願いを（転移はしたけれど）衰えさせはしなかった。エジプトを「フランス的学問の府」に転換し、「[エジプトを]完全に開かれたものへと変え、「…目に見えるものすべてを分割し、陳列し、図式化し、表に並べ上げ、索引を付けて、記録する」という試みにおいて、現地にいる測量士も学者も、あるいはパリにいる作家や版画家たちも、そのいずれもが、細部の規律=訓練というものを、細部に至るまで完璧に実行したのである[52]。サイードは、（一つと言わず多くの意味において）こうした「記念碑的記述」の血統が、明らかに近代的なオリエンタリズムを開拓し、形成し続けたのだと論じる。それゆえ彼は、1836 年に出版されたエドワード・レイン Edward Lane の古典的著作、『近代エジプト人の風俗と習慣』を、「…エジプトとエジプト人を完全に可視的なものにし、読者に隠されるところなどない状態に留めて、エジプト人を膨れ上がった細部にあって深みのないものにしてしまう試みであると読む。同様に、彼は、1849 年から 50 年の間に書かれた『オリエント紀行 Voyage en Orient』のためにせっせと日記をつけ、自分の見たものと自分の見方の両方に魅了されてしまったギュスターヴ・フローベール Gustave Flaubert にとって「問題だった」のは、「ただ寸分も狂いもなく正確な細部を写しだすことだけ」であったと述べる[53]。

c **可視性** Visibility：第 3 に、先の二つのパラグラフにもほのめかされているように、フーコーとサイードは両者ともに、細部の規律=訓練というものが、「構築された可視性の空間 spaces of constructed visibility」に依拠するものであると論じている。この表現は、ジョン・ライクマン John Rajchman から借用したものであるが、彼は、フーコーの言う分割と細部の歴史とは、空間の生産がその中心的な役割を果たす「可視的無思考 the visual unthought」の歴史でもあると述べる。言い換えれば、フーコーはとりわけ、事物が種別的な仕方で目に見えるものとなるために、空間がいかなるかたちで組み上げられているかということに関心をもっていたということである[54]。それゆえにフーコーにとって、ナポレオンが、かくも中枢的な重要性を秘めていたわけである。彼は、おそらくフランスの「スペクタクル的権力」が「一望監視的権力 panoptic power」に屈したあの歴史的瞬間を象徴する人物なのである。

> [ナポレオンは]一つの象徴的で最終的な人物像のうちに、長い〔歴史〕過程全体を集約したのであるが、その過程をとおして、統治権の豪華な誇示が、必然的に見世物本位な権力の示威がひとつひとつ消え去ったのは、監視の日常的な行使のなかであったし、警戒怠りない視線の交錯によってやがて太陽（ルイ十四世は太陽王だった）をも鷲（ナポレオン一世の紋章）をも無用にする一望監視方式panopticism のなかでであった[55]。

サイードはまた、権力と、フーコーが「まなざしの帝国 the empire of the gaze」と称しているものとの分かちがたい関係を強調しているが、サイードはこれをまさに文字どおりのものとして理解している。彼の主張によれば、植民地化過程にともなうオリエンタリズムの刻印はパノラマ的に構成されたものであるという。「オリエンタリストは東洋を、自らの前に広がるパノラマを把握せんがために天上から調査する」。この言い回しは、ギリアン・ローズ Gillian Rose が明敏に、「権力の居心地の悪い快楽」と見て、マスキュリニスト（男性性志向）的観察者の見る機械としての男性性の前に横たわる女性としての東洋 the Orient-as-woman と想定したものについて語っているように思える[56]。だが、オリエンタリズムの視覚的項目はパノラマ的なものに限定されるものではないし、東洋の性愛化 eroticization にまさるいかなるものも異性愛的心象 heterosexual imaginary に限定されるわけでもない。まなざしの帝国に巻き込まれた性的なポリティックスは、オリエンタリズムとマスキュリニズムを単純に同一視することより遥かに複雑で不安定なものであった。ジョセフ・ブーン Joseph Boone の言葉には説得力がある。オリエンタリズム的な同性愛 homoerotics は、いつもながら、例えば西洋的同性（愛）嫌い homophobia の刃の上で震え上がっているのであり、こうした心象地理、つまり心のなかのスクリーンに映し出されるこれらの幻想を注意深く読みとろうとするならば、性的なステレオタイプと植民地主義的比喩とのせめぎあいによって生

み出される曖昧さと矛盾というものを認めざるを得ないだろう[57]。

しかし、これはサイードのもくろむところではない。むしろ彼は、『オリエンタリズム』の中心となる章で、19 世紀全般にわたって、一種の魔術的な劇場 magic theatre、豊かで異国情緒に満ちた世界の寓話が展示される「ヨーロッパに附属する」演劇舞台とでも言うべき、ヨーロッパ人による東洋 the Orient の表象が、タブロー tableau や博物館ないしは学問的素材 a disciplinary matrix と化した表象によって、(全体的な転移がなされたことはないにしろ) いかなるかたちで塗り重ねられてきたかを示そうとしているのである。彼の描き出す年表は、フーコーによるルネサンス、古典、近代に対する認識論的区別を繰り返してもいれば、邪魔してもいる。例えば、ルネサンス期ヨーロッパの劇場の言語と地理の言語には、密接な派生関係 filiations があったし、オリエンタリズムはこうした仕掛け device を、半ば知られ半ば想像された世界の召喚に動員したのであった[58]。『エジプト誌』が「奇妙な享楽 bizarre jouissance」と期待していたような東洋 the east のタブローは、劇場のイメージ the theatrical imagery を継続しているし、同時にまた、およそ近代的なものである博覧会の感覚を呼び覚ましもする。それゆえサイードは、それに「匹敵する有用性」が、「近代のデパートの名店街や売り場」に見出されるのだと述べる。同様に、東洋の表象は、文化的諸断片がタブローと化したオリエンタリズムの諸範疇のなかで再構成され配分されるような「壁のないイメージ上の博物館」であり、全くもって異なったデパート化 departmentalization の秩序を召喚する。これはまさに、フーコーのいう古典時代的、18 世紀的分類の象徴であるテクスト的な在庫目録 inventory なのである。最終的に、サイードが「一種のベンサム的パノプティコン」と記すもののなかに出来上がった東洋の枠組みは、「その中に東洋的事物が吟味、研究、裁定・訓育ないしは統治されるための階級、法廷、監獄ないしはマニュアルのなかに」〔位置づけられる〕権力=知のシステムを予期するために、タブローと表を越えてまなざしの帝国を揺り動かしていく。すなわちこれは、「博覧会としての世界 the world-as-exhibition」を植民地化する装置の内部に刻印された訓育的権力を準備し支援するものなのである[59]。

3 エジプトを記述する Describing Egypt

こうした説明をいくつかの仕方で拡張したり改訂したりすることは、間違いなく可能であるが、私はオリエンタリズムの視覚制度 the scopic regimes とでも言うべきものに対するサイードの関心の高さに着目したいと思う。実際のところ、オリエンタリストのテクストに埋め込まれている視覚的な比喩・技術・戦略というものを彼は常に強調している。このことは、彼が視覚芸術それ自体には関心を払っていないことと同じぐらい注目に値する点である[60]。サイードが地理をイメージする imag(in)es その仕方に関する私の議論を整理するために、『エジプト誌』初版の口絵に関する 3 つの読解 readings を提示しておこうと思う (図 2)[61]。

この画像 image は、様式化された寺院の門から見た古代エジプトのモニュメント化された景観を示すもので、今日エジプトに暮らす人々の生活感を示す印 signs は、ここからは完全に消し去られている[62]。この位置から、われわれは一つの現実には不可能な眺め方によって、前景のアレクサンドリアからその奥のナイルの谷へ、そして遥か彼方のフィラエ Philae へと各遺跡に眼を移していく。これはパノラマに特徴的なことであって、デニス・コズグローヴ Denis Cosgrove が「ものを見る一つの方法としての景観 landscape as a way of seeing」と称しているように、その光景にあるべきはずの監視的な眼は視野から欠落しているのである[63]。しかしこの場合、こうした不可能な眺望を可能 possible とする装置とは、パノラマを縁取るパネル上に描かれた凱旋のパレードである。上部のパネルは、軍の旗印である鷲と古代の正統的な継承者を言外にほのめかす恐らくはナポレオンと思しきローマ時代の英雄の換喩的な形象 figures を通して、マムルーク Mamelukes をピラミッドへとけちらすフランス軍の姿が描かれている。その後ろには、遠征軍につき従い、『エジプト誌』編纂のための調査を進める学者たちの寓意的な形象がある。打ち負かされたマムルークは下部のパネルに再び登場し、両腕を垂れて、不滅の象徴である大蛇によって飾られたナポレオンの紋章の中心性を認めている。両側面のパネルには、エジプトでのフランス軍の軍功を示す装飾が施されている。すべてにおいて私は、権力=知が解消不可能な結合体であると結論することが可能だと思う。実際、フーリエ Fourier が『エジプト誌』の序文に記しているように、

この偉大なる業績は我が祖国の栄光に関わるものである。これはまさしく兵士たちの軍功によるものであり、科学と武力[*les sciences et les armes*]の結合の賜物であり、それらの連帯の証であり成果なのである。

しかし、これは紛れもなく権力と知と*地理*の結合でもある。というのは、これが記念化された景観 landscape であり、調査者たちは、フランスの名の下、あるいはその一部としてと言うべきかも知れないが、エジプトを凝視してこれを征服し、権力と卓越した地位をもつ者として刻印されているからである。

学者たちの貢献の独自性は、フィールドでの観察に基づく経験科学への関与という点に顕著であり、『エジプト誌』は、とりわけ表象の極めて細かな細部によって卓越している。初版と第 2 版の両方において中核をなす古代エジプトに関する書物のなかで、デイヴィッド・プロチャスカ David Prochaska は、これらの画像がパノラマから細部へと到る階層的な視界の連なりとして組織化されていると述べている。これは、博物館としての世界という近代的枠組みによってほのめかされる「視界の組織化 organization of the view」と全く符合するものであるが、こうした特定の場合において、地形学 topographies や記述的測地学 descriptive geometries は、事実上エジプトの地理的記述 geo-graphing を規定し、この記述の力がこのテクストの拡散的な諸巻に類希な結合性を与えているのである。何れの場 site にあっても在庫目録は、文字どおり鷲の目で見た風景から始まる。その際、地勢図 topographic maps は古代

図 2　『エジプト誌』：口絵

遺跡を位置づけるが、パノラマ的な視界のなかでそれらは陳列される。ついでこれらは遠近法的風景perspective views にとって代わられ、レリーフや刻印といった、拡大された細部へと解体されていく（図3）。こうした相互に連結した連なりは、どの場においても反復され、そうして帝国的旅行記は、南はフィラエから北はアレクサンドリアまでナイルの谷を下っていく。その可動的まなざしはある種のプロト GIS（地理情報システム）へと組織化されるのである。口絵に集約されているのはまさにこの行程であり、物的形態をとったまなざしの帝国なのである[64]。

この細部化された表象の様式とは、単に経験的な権威 empirical authority――『エジプト誌』を最初に手にした読者たちを眩惑させ、今日の民族誌にもそうした力を大きく附与しつづけている「そこにいる being there」という感覚――を主張するだけでなく、植民地的正当性 legitimacy、すなわち、学者たち、さらに拡大してそのヨーロッパにおける追随的支持者たちが、そこに行き、果てはエジプトの教化にとりかかれるような権利を与えられているのだ entitled と主張するその方策なのでもあった。私がこのように述べるのは、フランス人が、なぜ頻繁にエジプトの古代遺跡とともに自らの姿を描いてきたのに対して、その当時（現代）のエジプトに自らを描き混まなかったのかということに、また既に見た西洋の観察者の不在ということによって際だつ、いわゆるオリエンタリスト的絵画性orientalist picturesque と極端に対照的なのはなぜかということに注目すべきだと考えるからである。この自動書き込み autoinscription の実践は、1801 年、イギリスの侵攻によって撤退を余儀なくされ、エジプトにおける短期間の駐留を終えることとなったフランス軍の不朽の記録であるのみならず、フランス文明の揺りかごないしは鏡として、「理性が勝利を収める一種のエデンの園、または賢明なる君主の手によって統治された全き世界」[65]として、エジプトを暗黙理に喚起するものでもあった。アンヌ・ゴドレウスカ Anne Godlewska が、架空のエジプト a fantasy-Egypt と称するところ、そこでは「何世紀もの東洋的専制政治によって汚されてきた」惨めな現在よりも――理性的 rational であるがゆえに――「もっと真実らしく、もっと現実らしく」理性の灯火が古代エジプトを照らしているのである。それゆえにゴドレウスカは、これが三番目の読解なのであるが、この口絵が次のようなことを示していると論じるのである。

> …エジプトの傑出した遺跡群のすべては、前景に、コンテクストを無視して描かれている。それはあたかも、今にも地中海へと船で搬送されるべくすべて近年中に収集されたかのようである。…これこそが『エジプト誌』の著者たちや編者が最も獲得しようと欲したエジプトであり、求められ、本国へと持ち去られるエジプトなのである[66]。

これら 3 つの読解は、サイード自身の『エジプト誌』に関する見解の概略と類似している。「ナポレオンとその配下の者たちが見出したもの」は、「フランス侵攻軍と古代エジプトとの間のいたるところで、イスラム教徒やアラブ人、果てはオスマン駐留軍によってその古代的な側面が覆い隠されたエジプト」であった、と彼は記す。その遮蔽幕を取り除けるために、つまり、古代エジプトの遺物から直接ヨーロッパの近代性へと導く道を開くために、「…あたかも近代エジプト人はひとりもおらず、ただヨーロッパ人の観客がいるだけであるかのように」、再構築されていったのである。古代エジプトは、「帝国のまなざしを通して映し出されるものとして」上演される。その物的文化は結局のところ「…彼ら自身のコンテクストから抜き出され、ヨーロッパで利用されるべく運び去られた」[67]のである。しかし、私は自分の読解が望むらくはサイードのものよりも明白に、帝国的企図を可能ならしめるこうした表象のうちに刻印されている、権力と知と地理の間の連関を解き明かせればと思っている。

このことについてはさらに念を押しておかねばなるまい。というのもオリエンタリズムの心象地理の種別性 specificity についてもまた強調しておきたいからである。少なくとも 3 つの理由からこのことは重要であるといえる。まず第一に、権力=知の植民地的布置のなかにある場所と空間の特定の重なり合い imbrications について忘れずにいる必要がある。私は、サイードの空間的感性の多くの部分が依拠しているところの、フーコーの「幾何学的転回 geometric turn」が「具体的な場所感覚以上に抽象的な空間感覚を持ち上げる」[68]危険を冒しているという示唆に共感を覚える。しかし、既に指摘したとおり、オリエンタリズムは、抽象的（あるいは抽象化された）abstract(ed)空間の、強制的で、しばしば暴力的な産物と、またその様々な場所の特定

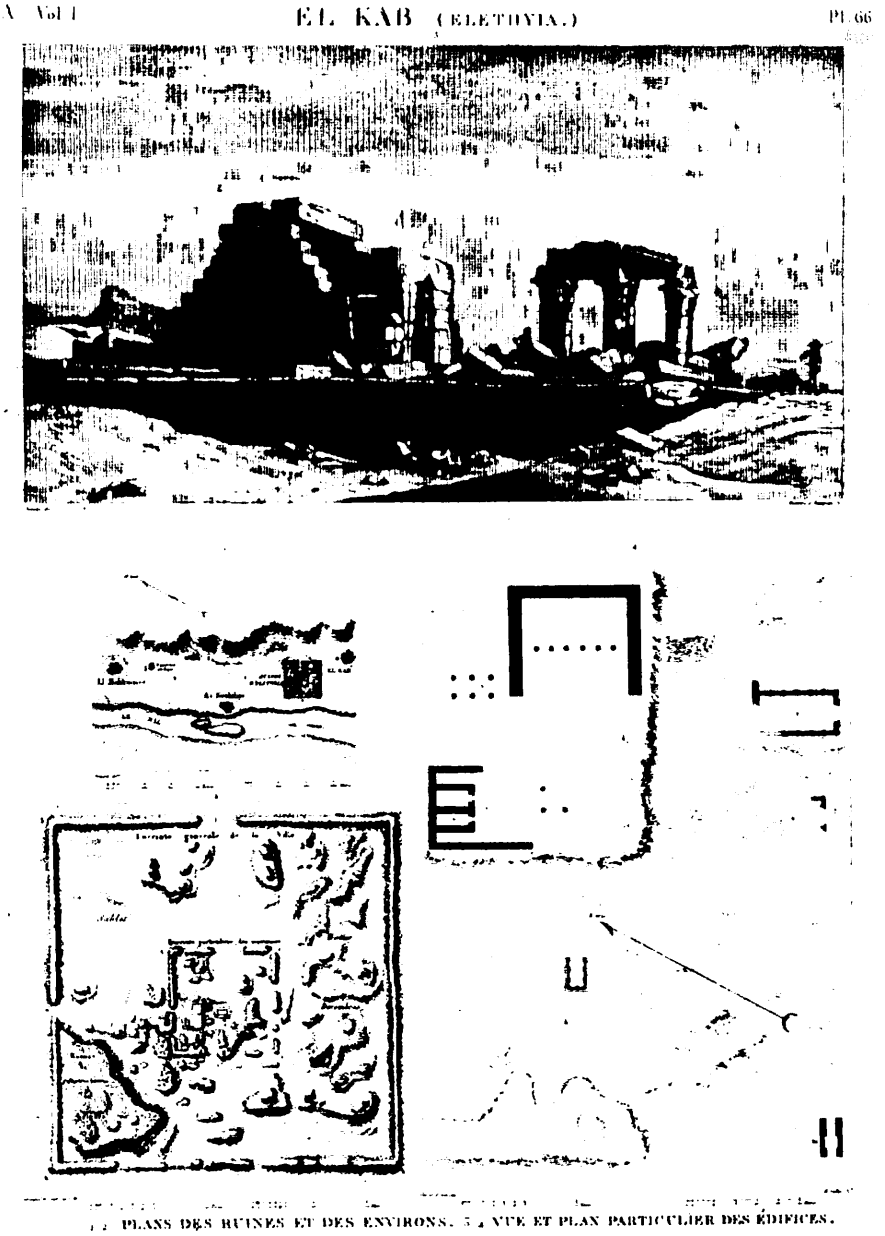

図3　『エジプト誌』：視線の組織化

性への重ね焼き superimposition と密接に関連しているのである。それらの場所は、オリエンタリストの旅行者たちによって表象されるような時間性を欠いて timeless 本質化された essentialized セッティングであったためしなど一度たりともなかった。——エジプトの人文的地理の歴史性と異種混淆性については強調しておく必要がある——。19 世紀の間にそれらのテクスチュアがヨーロッパ的な権力=知の格子のなかに取り込まれ改訂された。逆に、これらの場所の結合、より広範な社会的実践の網の目のなかに局所化された結び目は、オリエンタリズムの空間を書き換えてしまう。そうすることでその心象地理の二項対立的区分は、極めて不安定なものになっていくのである。これこそが、オリエンタリズムの心象地理のなかに持ち込まれた特定の場所について、その投影的幾何 projective geometries の破壊性と空間の輪郭の変遷の両方を地図上に落としていくために、サイードが行ってきた以上に多くのことを言っておかなければならない理由の一つなのである第二に、これらの抽象化された空間の産物とその上置とは、またヨーロッパ内部にあっても展開されていたわけであるが、ヨーロッパという枠を越えて拡大する過程においては、他の権力=知の様態を借りるようになった実践と約束事 protocols に依拠したのであった。例えば、19 世紀のブルジョアたちは、世紀初頭には『エジプト誌』の図版を見つめ、世紀半ばにはルーヴルのエジプト陳列室に群がり、そして世紀末にはナイルを遡ったけれども、これと同様にしてブルジョアらがパリを知っていく視覚的諸実践は、彼らが 19 世紀のカイロを知った諸実践と根本的には違わないのである [69]。しかし、ヨーロッパの外側では、こうした視覚的実践は植民地主義や帝国主義と密接に絡み合っていて、サイードがはじめに提起しているように（455 頁上段）、単に「われわれの空間」と「彼らの空間」を区分することを意味するだけでなく、「われわれ」が「彼ら」の空間に到達し、心象上、そして結局のところ物的にその空間を領有して「われわれのもの」として主張する、心象地理を生み出すのである。サイードはこれを、19 世紀ヨーロッパにおける唯一の災いを為す成果と見ている。彼は論じる。「ヨーロッパ本国を越えてしまうや否や」、芸術も表象の規律=訓練も「非ヨーロッパ世界を表象のなかに引き入れようとするようなヨーロッパの権力に左右されるようになってしまった。それを理解可能にするだけならまだしも、それを支配し最終的には所有してしまうのだ」[70]。

第三に、歴史的に彼らが左右されてきた表象の実践を変節させることによって、こうした領有に抵抗することが可能となる。例えば、それゆえにこそサイードは、現在、それ自体の「細部の」規律=訓練を推し進めることのできるようなパレスチナのリーダーシップを求めているのである。彼は、1993 年、オスロで調印された合意声明 Declaration of Principles へと達する諸交渉で用いられた文書と地図がいずれもイスラエルが作成したものである点に注意しながら、パレスチナは自らの地図を作成し、「各々の細部が全体を構成する有機的役割を担うものであるような」[71]、その場その場での体系的対抗戦略を練る必要があると主張する。地図作成法の中立性に関してサイードは極めて懐疑的であるとはいえ、彼の議論は、地図の脱構築にのみ向けられたものではなく、オリエンタリズムの、さらには転じてシオニズムの心象地理の種別性にもまた向けられているのである。というのも、私がこれまで論じて来たように、もし細部の規律=訓練が、構築された可視性という種別的な空間の生産に関わり合っているのであれば、その視覚的実践を方向転換 détournement することは、パレスチナ人を、彼／女ら自身の住み慣れた土地の居住者というものとは異なったかたちで目に見えるものとし、彼／女ら自身を表象するという結果をもたらすであろう [72]。かくして、サイードのオリエンタリズムの系譜学と『最後の空も尽きた後に』に関する彼の考察の結びとの間には深遠なる連続性が見て取れるのである。

私たちは、ここに収められた写真の中で見られたり眺められたりするだけの民族にはとどまらない、と私は思いたいのである。つまり私たちは、自分を観察する人々を見詰めてもいるのだ。私たちパレスチナ人は、時としてそれを忘れてしまう。——国から国へと渡り歩いてみても、パレスチナ人に関する監視・監禁・研究は、私たちの地位を貶め、対立的・不均衡で常に防御側に廻る＜他者＞としてしか私たちの民族的充足を認めようとしない政治的手続きの一部になってしまっている——しかし、私たちは私たちで、眼を光らせているし、吟味・評価・判断を行なうことに抜かりはないのである。私たちは、誰かの対象〔客体〕などにとどまるものではない。その理由が何であろうと、私たちを眺めたがってきた相手に対しては、その相手が誰であろうと、その前に受動的に立ち尽くす以上のことを私たちは行なうのだ。仮にあなたが、結局のところ、私たちにそ

ういう態度は見えないではないかというにしても、その咎を負うべきは自分たちばかりだと信じ込むようなことは、今後、私たちにはあり得ないであろう。そんなことは金輪際ありはしないのだ (Not any more) [73]。

IV 地理を転移させる Dislocating geography

これまでの章で私が立証しようとしてきた結合関係——場所と空間の接合と、パリとカイロの間のモジュール（互いに交換可能な構成要素）化——について明らかにするために、また、この戦略的反転を可能なものとするためには、『文化と帝国主義』のなかで「対位法的読解 contrapuntal reading」と呼ぶところのものへ移行していくことが必要であるとサイードは説く。彼の足跡を辿ろうと思うが、その前に、私には、複雑化する二つの問題についても考察しなければならないと考えている。一つは植民地主義によって「強化された視覚 consolidated vision」の問題、次にその「重なり合う領域 overlapping territories」の問題について込み入った観察を行なう必要があるだろう。

1 強化された視覚

18 世紀も終わりを告げようとする頃、フランスの作家、ルイ=セバスチャン・メルシエ Louis-Sebastien Mercier は、滞在していたホテルで朝食のために階下へと降りてきた。リンダ・コーリー Linda Colley は次のように分析する。

そこで[彼は]、パリ風の朝の食卓に並べられた帝国主義の姿を見たのであった。磨き上げられたマホガニーの表面が、コーヒーの湯気のように、彼の想像の世界に瞬時に、新世界植民地を思い起こさせたのである。上品な磁器は、武装した商人たちによって中国から、船で運ばれてきたのだと彼は推測した。砂糖は彼にカリブ海諸国における奴隷制について、香り高い紅茶はインドのプランテーションについて語りかけた。ヨーロッパ人が略奪を繰り返してきた世界はもはやかけ離れた場所での企みなどではなかった。それは本国での生活を構成するもののまさに一部なのだ。しかし、そうは記したもののメルシエは、自身が類希な洞察力を持ち合わせていることを明らかに喜んでいるのである。彼は自分の傍らで食事をとっている人々が、自分が悟ったように悟っていたとは考えなかったのだ [74]。

視覚的イメージとは衝撃的なものであって、サイードもまた同様の点を指摘している。「19 世紀の大部分、帝国は、ほんの少しでもそれを垣間見ることが出来るのであれば、まるで気高い家庭に雇われたか、あるいは小説に描かれるような召使いのような、物語のなかのコード化された存在 codified presence として機能している」と彼は記す。「その所業は当然のものとして受けとめられ、決してその名以上のものではなく、人の関心を引いたり重きをおかれることなどまるでないのだから」[75]。これはまた別の視覚的隠喩 visual metaphoric に乗じた知覚的観察でもあるのだが、いま注意したような見落としが、サイード自身の『文化と帝国主義』への変遷のなかに映し出されているのである。そこでは、『オリエンタリズム』の核となる諸章においてあれほどまでに際立っていた視覚的主題 visual thematic が、事実上覆い隠されてしまっている。

しかし、これは見かけ以上に複雑な問題である。サイードは、本国の文化とその植民地主義との関係を手早く喚起するために、もう一つの視覚的イメージを提示している。それは、ギー・ド・モーパッサン Guy de Maupassant が、パリで唯一エッフェル塔が見えない場所という理由から、昼食の場としてエッフェル塔を選んだというものである [76]。しかしながら、その頃までに時世は変貌していた。エッフェル塔は 1889 年、パリ万国博覧会のために建造されたものであるが、この博覧会はフランス革命百周年を記念したものであるのみならず、「イスラム教のミナレット、カンボジアのパゴダ、アルジェリアのモスク、そして、チュニジアのカスバ casbahs」が、明らかにフランスの植民地を、本国のそして世界中の観客の目の前に陳列すべく配置された植民地都市の似像 simulacrum を初めて統合させたものでもあった [77]。19 世紀最後の 10 年を迎えるまでの間に、非ヨーロッパの景観への本国文化の逆の投影もまた、植民地の都市計画に関する言説や、その他、道具的とは言わないまでも植民地文化的所産のなかで一般的なものになりつつあった。新しい世紀を迎えようとする頃、アシェット Hachette が出版したガイドブックには、エジプトが次のように描かれていた。「エジプトの姿は何がどうであれまさにエッフェル塔のようである。柱の部分は高地エジプト Upper Egypt、土台はデルタである…その内部に広がる空間は耕地であり、外部には砂漠が広がる。両者の交差するところ、そこがカイロである」[78]。比喩的には文明とも置き換えられる耕地という包状の領域は、紛れもなくすでに

ガリア的な象徴となっていたもののなかに含まれていた。それ以外の場所は乾燥と不毛の地である。しかしサイードは、こうした心象地理のなかに刻印された視覚的文化や図像について一切触れてはいない。多くの場合、彼の植民地主義的および帝国主義的な眼への関心は、断固として隠喩的なものであるように思われる。

サイードは双頭の論立てをしている。一方で彼はコーリーに賛同し、帝国に対するヨーロッパ文化の受容性には「根本的な不均衡」があるとしている。イギリスの帝国的企みの規模 scale を前提としつつ、彼女は「確かにこのことがその文芸文化 literary culture に影響を及ぼすに違いないということではなく、影響を与えた以上に影響を与えることに失敗しているという点に注目すべきである」と主張する。コーリーは、サイードがこの逆説に正面から取り組もうとしないこと、あるいは少なくともそれに説明を与えようとしないことについて述べているけれども、文化と帝国主義の関係が 19 世紀最後の 10 年間になってから明確なかたちで提示されたに過ぎないということについて、彼は間違いなく認めているのである。「世紀半ばを大幅に経過して初めて、帝国が、ハガード Haggard、キプリング Kipling、ドイル Doyle、コンラッド Conrad といった作家たちの関心を集める大きな主題となった」と彼は見ており、「…ヨーロッパ文化が最終的に帝国的『妄想と発見』に対してしかるべき考慮を行ない始めた際に」それに伴われたのは、モダニストに特徴的な身ぶり、すなわち皮肉であったとサイードは論じる。ヨーロッパの作家たちは「諸外国を、また彼／女らが見たものによって驚愕し衝撃すら覚えるような人々を、懐疑をもって眺め始めたのである」[79]。しかしながら、他方でサイードは、植民地主義と帝国主義がかなり以前からヨーロッパ的な文化の所産のための基盤として機能していたとも述べている。

> イングランド文学のなかに帝国主義下における世界地図のようなものを探し始めるならば、それは 19 世紀より遥か以前に、驚くほどのしつこさと頻度の高さとともに見つけ出すことだろう。そして、何か自明なものをほのめかす緩慢な規則性 inert regularity だけでなく、より興味深いことに、言語的・文化的実践の組織構成において極めて重要な部分を形成しながらそれらが連綿と続いていることに驚かされるであろう[80]。

地図作成法に関する抗議は、偶然行われたものなどではなく、『文化と帝国主義』全体に散見される。サイードは（彼の言い回しをつかえば）「帝国の強化された視覚」は、時間性に特権を与える、これまで行われてきたような批判的実践を通じては解き明かされないと論じる。「われわれは小説の筋や構造を主に時間性によって構成されたものとして捉えることに慣れてきた」、と彼は注意を促す。「われわれは、空間と地理、そして位置取り location の機能を見落としてきたのである」[81]。テクスト批判のありきたりの実践を補完するうえで必要なのは、とくに空間の結合可能性connectivity と並置 juxtaposition に関心を払うような対位法的な読解である。それゆえサイードは、彼が『マンスフィールド・パーク Mansfield Park』と『キム Kim』を読解するなかで、本国の行為回路 circuits of action を植民地的地盤に配線する敷設網として機能する、空間の階層構造について解き明かすのである。これはダナ・ポラン Dana Polan が、小説のなかに描き出される「現場 locale を横断する権力の投影と、利害や経済と結びつくことによって本質的に異なる状況を作り出すその表現のあり方」について述べていることである。ポランの用いる隠喩は、大半の部分が控えめに語られてはいるものの、植民地化を推し進める文化のひそかな空間性とまなざしの帝国との間に本質的な結びつきがあることを指摘している点で意義深い。この本国における「権力の投影」にはファンタスマゴリアのようなところがある。私は、ベンヤミンが商品文化 commmodity culture 批判で用いた比喩を比較のために拝借している。ファンタスマゴリアとは、19 世紀初頭のヨーロッパで人気を博すようになった幻燈機で、見ている者がその画像の源に気づかないようにするため、後背から投影するような仕組みになっている。ベンヤミンは、19 世紀ブルジョア文化のイデオロギー的投影を描き出すべく、またそれらの視覚的実践と「理解の構造 structures of understanding」のなかに見られる省略 elisions と忌避 evasions を解き明かすべく、こうした例えを用いている[82]。文化的所産を、サイードは「歴史を空間化しようとする帝国主義的イデオロギーの要請に押されてはいるが、スペクタクルなものを保証することで掩蔽しようとするまさにその歴史の痕跡を明きらかにしようとする対位法的な読解によって可能となっているような、二重の駆動装置」[83]と読んでいるとするポランの指摘のなかに、同じようなものの片鱗を見出せたとし

ても、それは決して絵空事などではないと私は考える。

2 重なり合う諸領域

視覚性、空間性、そして植民地主義に対するサイードのアプローチの変遷と密接に結びついていることであるが、彼の理論的な関心は、『オリエンタリズム』の際のフーコーから、『文化と帝国主義』におけるグラムシへと移行してきている。サイードの史的唯物論に対する関わり方は、様々に論争を巻き起こしている点からも窺えるとおり、言うまでもなく複雑なものである。それは、西洋のマルクス主義のまさに「西洋性」、すなわちヨーロッパとアメリカの文化をめぐるその典型的な閉止 closure が、文化横断的領域 register において彼がそれを召喚しようとするのを妨げてしまうからに他ならない[84]。それゆえ彼の関心を引いた特定のマルキストはさほど多くなく、せいぜいレイモンド・ウィリアムズ Raymond Williams とアントニオ・グラムシ Antonio Gramsci ぐらいのものである。

ウィリアムズは『オリエンタリズム』に多大なインスピレイションを与えた人物の一人である。これは、あれほどまでにイギリス的な思想家にとっては奇妙な役回りであり、サイードもウィリアムズの業績が、「頑ななまでにイギリス中心主義 Anglocentrism 的」であり、「ゆえにイングランド文学が主としてイングランドに関するものである」[85]という含意を孕んでいることによって限界をもっていることを認めている。しかし、彼は依然としてウィリアムズに最大級の賛辞を送り、彼自身の企図が、とりわけ『田舎と都会 The country and the city』に息吹を吹き込んだ獲得 acquisition と表象の弁証法によって影響を受けたものであることを述べている。彼はそれらが表象するものというよりは、むしろ「競合的社会的政治的関係の結果として存在する」文化的所産を解釈するための批判的戦略の典型的な例として、ウィリアムズが記した 17 世紀イングランドのカントリーハウスにまつわる詩を扱った文章を引用している。ウィリアムズの著作のなかで地理学に対する影響力が最も大きいのは、おそらく『田舎と都会』であろうが、これまで私が述べてきたことからいって、サイードの地理的感性が、ウィリアムズの景観に対する、あるいは彼が常々「耕作地の広がる農村部 working country」と称しているものに対する深い愛情と根底的に異なっていることは明らかである。あるいはこれが、サイードの初期の著作に対する彼の影響が、浸透力を有しながらも間接的であった理由なのかも知れない。彼の理論的定式化が引き合いに出されることはまれであるものの、彼の批判的実践の形態と様式はサイードの業績を活性化させている。これとほとんど同じことが『文化と帝国主義』での彼の存在についても言うことが出来る。この本の多くの部分は、「…レイモンド・ウィリアムズの示した理念と人間的道徳的規範に負うところが大きい」と、サイードは丁寧に記している。「負うところが大きい」のは確かだと私も思う。彼の情熱的なヒューマニズムは議論に輝きを与えている。しかし彼の言う「感情の構造 structure of feeling」という概念は、文化的所産が「…帝国の実践を支持し、練り上げ、強化する」その仕方を指し示すもっとも一般的な感覚においてのみ召喚される。この概念は、直接的には示されていないけれども、独自の「文化的地勢 cultural topography」を図示しようとするサイードの試みを引き受けるものである。文化的地勢のなかにおいて

> 所在 location の構造と地理的参照が、文学、歴史、あるいは民族誌といった文化言語のなかに立ち現れる。それらは、あるときは示唆的に、あるときは注意深く筋立てられており、その他の点では互いに関連を持たず、また公式の「帝国のイデオロギー」とも関係することのない個々の業績を結び合わせながら姿を現すのである[86]。

しかしながら、『文化と帝国主義』のなかで、そのテクストの主な設計を、示唆的でありながらもやはり間接的なかたちで支えているのは、グラムシである。サイードに権力と知と地理の交錯関係を地図化するための別の方法を与えたところに、彼の果たす役割があったことを指摘しておきたい。彼の貢献に特徴的なのは、それが二面性を有するものだという点であろう。まず第一に、サイードはグラムシが、権力と文化が結合する生産性 productivities と実証性 positivities、彼の表現に倣うなら「練り上げ」の業 the work of elaboration というものを強調している点に惹かれている。彼に言わせれば、グラムシは

> 権力が惹起する重大な中心的諸現象も、それらの現象が合理的コンセンサスによって作用する作動因全体の構造を通して流れ出してくることも、必然的に権力の自己保持の源泉となり、権力に日常の糧を提供するところの（拡散し

た、日常的な、非体系的な、どろどろした）細部のことも見逃してはいない。フーコーが出るずっと前から、文化というものが権威に奉仕するものであり、また究極的には民族国家に奉仕するものであるという発想を掴んでいたが、それは文化が抑圧し、あるいは強要するものであるからはなくて、文化が肯定的で、積極的で、かつ説得力を持つもであるからである[87]

と述べている。

したがって、サイードが地理学的表記法つまり「文化的光景 cultural vision」を可能ならしめる「帝国の地図 imperial map」に対して注意を促し、「両者に共通するのが権力的練り上げ elaboration なのだと示唆する際には、このことがまさにグラムシ的な感覚で理解されるべきだと私は思うのである[88]。

二番目に、西洋型マルクス主義の主流は徹底してヘーゲルに倣うものであり、サイードが認識しているとおり、歴史と歴史性とにとりわけ重要性をおくものであるが、グラムシの著作は逆に、（そうした帝国の首都を欠いた）空間と空間性とを強調するものである。サイードはグラムシの「南部問題の諸局面」と題された論考のなかに、こうした「明確な地理学的モデルを見出している。この論文は彼の『獄中ノート』への序奏となっており、このなかで「彼は、彼のすぐれた相方であったルカーチが払うことのなかった、社会生活の領域的、空間的、地理的基盤に最大の関心を払っていたのであった」。より具体的に言うと、サイードは、歴史の目的 the telos of History のなかで二律背反が解決されるような何らかの超越論的論理 transcendent logic にはグラムシは関心がなく、むしろ「物理的にこの地上にある矛盾だらけの現実としてそれらを見抜いていくことの方に」[89]関心があったのだと論じている。ベンヤミンを受けて言えば、こうしたある種の地理的布置と見得るものに対する感覚、すなわち、ある特定の場所における遠隔化された地理的諸状況の効果的結合によって形成される配置=構成 configuration に対する感覚が、植民地主義を一方通行路と捉えることへのサイードの反論と交錯するのである。

ある場合には、植民地的領域 colonial territories における歴史の比較的良い部分を、帝国主義的干渉 imperial intervention によるものとわれわれは推測するが、他の場合には、植民地における所業 colonial undertakings を、周縁的か、偉大なる本国文化の中心的活動からしてみればおそらくエキセントリックなものとして、同じように治癒しがたい憶測を行なうのである[90]。

サイードは、「重なり合う諸領域、相互に捩じれ合う諸歴史」としての文化と帝国主義との相互浸透を地図化することによって、「活性化していった帝国による分割によってあたかも地理的に裂け目を入れられたかのようにして西洋文化の史料を再解釈すること」が可能であると考えている[91]。

しかしまたグラムシは、依然として『文化と帝国主義』のなかにおいて、常にテクストのマージンや陰のなかにあって特別な存在であり続ける。言ってみれば、行間に出没するかたちで、サイードのこの後のインタビューや論評のなかでも繰り返し召喚されるのである。奇妙なことにサイードは、グラムシの概念装置を展開しようとしておらず、また充分に配備しようとすらしていない。ただもしそうしていたとしても、思うに彼は、植民地主義的「権力の練り上げ」を凝集性の低い用語として扱わざるを得なかっただろう。少なくとも、彼は植民地主義的言説に亀裂を生じさせる、こうした「テクスト的な断絶 textual gaps ・不確定性・矛盾」を認識することが出来たであろうし、結果として、パリーが言うような植民地主義と帝国主義の「強化された視覚」を粉砕するこうした抵抗的諸空間、あるいはグラムシが言うところの「相互包囲 mutual siege」を地図化することが比較的容易であるということに気づいていたことであろう[92]。『オリエンタリズム』と『文化と帝国主義』との大きな違いの一つは、事実として、サイードが抵抗の空間を広げていく決意を固めている点である。ここに至って彼は、フーコーの業績の主たる限界の一つを「抗し難い植民地化への移行 an irresistible colonizing movement」の記述に見る。「個は抗する望みの絶たれた、不可避的に展開していく『権力のミクロ物理学 microphysics』のなかで力を失っていく〔いかされる〕のである」と。しかし、集合的な主体的行為――あるいは被抑圧者 subaltern の抵抗と転移――の力に対するグラムシの情熱的な感覚については見落とされているし、被抑圧者に関する研究――植民地主義的ないかなる修正 re-visioning に関しても紛れもなく重要な意義をもつ――の企図と彼の関係についてはほとんど記されてはいないのだ[93]。

サイードは自らの研究方法を、批評理論に関する議論を通してではなく――その制度化 institutionalization、

中立化 neutralization、そして平凡化 trivialization についての懸念 wariness を私も理解している——音楽からもたらされる隠喩を召喚することによって説明しようとする。彼は自らの研究のモデルを、「かつての比較文学の諸観念がそうであったような」交響曲ではなく、「無調のアンサンブル atonal ensemble」に見ようとしている。実際のところ彼は、錯綜した不均衡な文化的地勢に対してグラムシが試みた地図化を、彼自身の対位法的読解の実践に置き換えているのである。

> 文化的史料を顧みるときに、われわれは単声的にunivocally ではなく、物語られている本国の歴史と、それに対して（また、それとともに）支配的な言説が動いていくところの、他の諸歴史の両方に対して同時に意識を向けるように、対位法的に再読し始める。西洋のクラシック音楽における対位法では、何れの場合も暫定的な地位に過ぎないことに変わりはないけれども多種多様な主題が互いに競い合う。が、結果とし生じるポリフォニー（複声音楽）においては協和音と秩序が与えられるのである。組織化された相互作用は、諸主題からもたらされるのであって、作品の外にある厳格な主旋律 rigorous melodic や形式的原理 formal principle からもたらされるわけではないのである。同じようなやり方で、われわれは、例えば西インド諸島やインドへのその関与が、言ってみれば、植民地化と抵抗と最終的にはネイティヴのナショナリズムという種別的な歴史によって形をとる、そしておそらくは決定すらされているであろうものとして、イングランドの小説を読み、解釈することが出来るものと私は確信している[94]。

音楽に関するサイードの論考の大半は、対位法的作品に焦点を当ててきた。オペラのような形式が彼の関心を引きつけるのは、まさに「数多くのことが同時に進行する形式」であるという理由からであり、熟考の末、同じ音楽形式によって、『文化と帝国主義』を構成する諸論考をまとめる決心を行なったのだと彼は言う。彼の意図は、すなわちそれによって「ある種の拡散的な exfoliating 変奏構造」を示してみせるところにあるのだ[95]。それゆえ、サイードの対位法的方法論に関する最も明晰な例証が、ヴェルディ Verdi のオペラ、『アイーダ』のカイロ初演について示した見解であると考えることは、全くもって適切なのである[96]。しかし、私はこの論文を単に方法論的な理由だけで考察したいとは思わない。その実質的な意義は、部分的に、19 世紀後半ヨーロッパのブルジョア文化の中においてクラシックのオペラが占めていた場や、転じてブルジョアジーの文化的構造 cultural formations とオリエンタリズムの文化の間の交錯点にあるのである[97]。しかし私は、これらの所産に対するサイードの取り組み方を、植民地主義と帝国主義の見ることをめぐる諸体制 the scopic regimes や、それらのなかに刻印された真実性の地理 the geographies of truth に結びつけて、さきに私が行なった議論を再開することも可能だと考えている。

3 『アイーダ』と真実性の地理

『アイーダ』は、1870 年前半の 6 カ月間にわたった長引く交渉の後、エジプトのヘディーヴ Khedive〔副王〕によって委嘱されたものである。まずはヘディーヴ劇場の監督、ポール・ドラネ Paul Draneht がスエズ運河開通を記念した祝賀曲 a celebratory hymn を書いてくれるようヴェルディを説得にかかったものの、ヴェルディはこれを丁重に断り、これがヘディーヴの野心に火をつけた格好になって、ついに彼は「純粋に古代的でエジプト的なオペラ」[98]を心に思い描くようになったのである。物語のあらすじは、著名なフランスのエジプト学者で、ヘディーヴの下、エジプト全土の遺跡発掘に携わっていた、オーギュスト・マリエット Auguste Mariette によって書かれた。これは、エジプト軍の名将 captain ラダメス Radames と、エチオピア王の娘アイーダとの悲劇的な恋の物語を描いたものである。アイーダは囚われの身となり、ファラオの娘の身の回りの世話をする奴隷として働かされていた。この物語は、軍事的な対立や攻撃を背景にしつつ、嫉妬や裏切りを中心に展開されている[99]。

『アイーダ』から解釈されるポリティックスは極めて複雑である。アンソニー・アーブラスター Anthony Arblaster も、幾つかの視点から、「ヨーロッパ帝国主義の絶頂期における意気揚々たる作品」というべきものであろうと述べている。しかし、彼が言うように、この作品はヨーロッパの地政学的状況に関する移し換えられた注釈とも読めるのである。かくしてサイードは、イギリスが暗黙のうちに、東アフリカにおけるフランスと、イタリアの野望を打ち砕かんがためにエジプトの拡張主義を促進し、そうして「『アイーダ』は、マリエットによって具体化されたフランス的視点から、エチオピアにおけるエジプト人の軍事政策が成功を収めることに対する危機感をドラマ化したもの」と論じる[100]。「フランス人の視点から」この作品が書かれた

というのは正しくそうだろう。しかし、サイードは、ヴェルディ自身が帝国主義の守護者ではなかったこと、そして彼が率直にヨーロッパ権力の領土拡張の野心に驚いていたということについて記してはいない。ヴェルディはマリエットの書いたあらすじを展開し、台本を書き上げる創作的 active な役割を担っていたわけであるが、このことからアーブラスターは、『アイーダ』による古代エジプト人や聖職者の好戦性や無慈悲さの告発は、「普仏戦争を嘆き、その増大する権力と野心を（正しくも）恐れていた」ヴェルディが、プロイセンとの鋭い比較を意図したもの求めようとしたものなのだと論じている[101]。しかしながら、いかにこの論に意義があろうとも、サイードの主張の中心は、その上演が「帝国主義的支配*に関わる*という点で意味をもつのではなく、帝国主義的支配の所産であるという点で重要なのだ」というところにあり、私はカイロでの上演に裏打ちされる真実性の地理を描くことによって彼が意図しようとしていたと思われることを解説してみたいと考えている[102]。

これは賛否両様に取れる論立てであった。一方で、ヘディーヴは精密性 accuracy と真正性 authenticity に無比とも思しき価値を premium を見出していた。マリエットはエジプトを舞台設定するにあたりその細部に渡るまで知りぬいていた。1867 年のパリ万博におけるエジプト館の準備に彼は深く関わっていたし、これを「生きた考古学のレッスンである」とも記している。中央にはフィラエの寺院の模型が据えられていたのだが、マリエットはフィラエにおける正確な測量、写真撮影にもとづいてこの模型を作成したのであった。妥協は数多く避けられなかったけれども、マリエットは「…その調和における最大限の真正性と細心の注意が払われた細部」には胸を張っていた[103]。それゆえ、ある意味で『アイーダ』はパリ万博の美学へと充分に連なるものであり、ヘディーヴが厳格なまでに正確な*舞台装置 mise-en-scène* を『アイーダ』に求めた際、マリエットは自らの迫真性へのこだわりを肯定、いやある意味では再肯定したのである。

> 舞台は歴史学的見地にもとづいて組まれる。衣装は高地 upper エジプトの浅浮き彫り bas-relief に倣ってデザインされる。この点に関して取り立てて努力する必要はないし、舞台装置は想像以上に素晴らしいものとなるであろう。地域色を維持することに対するこうした注意深さが、同様にあらすじの中に地域色を残すためにも必要なのである[104]。

しかしまた、このオペラがエジプト*に関する*ものであり、世界初演はエジプトで行われることになっていたにも関わらず、その背後ではヨーロッパにエジプトをしっかりと結びつける地理上最大級の転移が行われていたのである。そういうわけで、他方、『アイーダ』は、イタリアにおいて、そしてイタリア語で書かれており、アラビア語で唄われるべきという議論など微塵もなかったのである。マリエットは、フランス人の職人と衣装家によって仕立てられる舞台および衣装製作の進捗状況を監督するためパリに派遣された。劇団はイタリアに送り込まれ、ヘディーヴは、パリ、ミラノ、もしくはジェノバでリハーサルを行わせる心づもりでいた。これは壮大なスケールでの時空圧縮 time-space compression であった。サイードもまた依拠する、ハンス・ブッシュ Hans Busch の『アイーダ』に関する傑出した実録史が示すように、ジェノバ、パリ、そしてカイロの間で郵便袋は大きく膨らみ、電報の回線はうなりを上げた。1870 年の 7 月までマリエットはパリにあって、こうした事々の真っ直中にいた。彼は記す。「[ヘディーヴ]の命を遂行せんがために、そしてまた絵のように美しいばかりでなく学問的にも裏打ちされた舞台装置を作り上げんがために、世界全体を動かさねばならなかったのです」[105]。その数週間後のことであった。プロイセン軍がフランスに侵攻し、パリを包囲した。残された外界とのコミュニケーションの手段は、伝書鳩か風船だけであり、舞台と衣装に関わるすべての作業は 11 月まで中断され、初演は延期された。請負業者たちはいずれも翌年の夏まで作業を再開することが出来なかったが、マリエットはその出来映えに心から満足していた。「ピラミッド群の光景は見事にクレートのなかに収まっています」と彼はドラネへの書簡に記した。「非常に素晴らしい出来で喜ばしい限りです。幕の上がるそのときから、自らがエジプトにいるという感覚を疑う者は一人もいないことでしょう」[106]。

しかし、無論そのとき観客はエジプトにいる in ことになっていた…しばらくこの点について考えてみたい。カイロのオペラ座にいる観客は、それがエジプトに搬送されてきたものであると「心から信じる」ことであろう。それはすでにエジプトにある is からでもなければ、どんな物であれオペラ劇場では決まってばつの悪

い[107]、芝居がかった信心による浮遊状況によるものでもなく、エジプトが、劇場の外に広がる街路や市場よりも「真に迫ったリアルな」(461 頁上段参照) 光景として提示されているからに他ならない。このエジプトは、まさしく風景を*編制している organized* がゆえに、すなわち舞台が枠取られ framed ているがゆえに、さらには「別のエジプト other Egypt」、つまりオペラ座の入り口で押し止められるエジプトなるものには欠落していると思しき、奥行き depth や遠近感 perspective、首尾一貫性 coherence——つまりは*意味 meaning*——をもつものであるがゆえに、真に迫ったリアルなものたり得るのであろう[108]。

マリエットの心情は、思うにジャン=ルイ・コモリ Jean-Louis Comoli が「可視性への熱狂 the frenzy of the visible と称するものに刺激されている。これは 19 世紀後半、爆発的に拡大したもので、彼曰く、この時代こそ「世界全体が可視的なものになると同時に領有可能なものとなった」[109]瞬間であった。マリエットの驕りの背後にあって「彼の」エジプトに迫真性をもたらしているものは、裏返しの考古学 archaeology-in-reverse のようなものを介して負わされた真実の体制 a regime of truth であり、そのゆえに植民地主義的および帝国主義的文化の内部における視覚 vision と領有との相互連結こそが最重要なのである。『アイーダ』の舞台 (図 4) は、明らかに『エジプト誌』をもとに構成されたもの

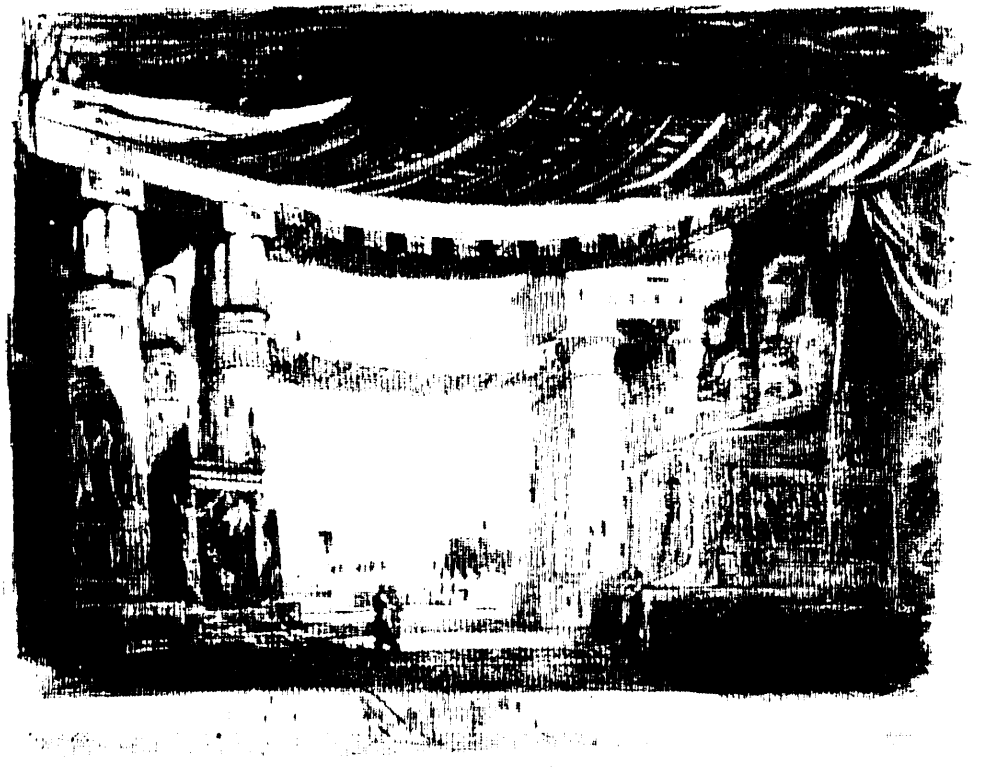

図 4 ヴェルディ『アイーダ』カイロ初演の舞台デザイン：第 2 幕第 2 場：テーベの入口
(舞台装飾家：エドゥアール・デプレシン)

であり、ちょうど学者たちが図面と風景の素描を行い、ときには舞台装置をパリへ搬送すべく分解して木枠に収めたのと同じように、今度はそれと同じ図版が、パリで分解され木枠に収められてエジプトに戻されようとしていた「真のエジプト authentic Egypt」を再構築すべく用いられることになっていた。「翌週」とマリエットは記す。

> われわれは舞台背景の最初の一箱を[運送業者]に引き渡しますが、舞台枠張り flats の組立をはじめ、エジプトで行うべき作業は数多く残されています。舞台は非常に複雑なもので、すべてを組み上げていく作業は困難をきわめることでしょう。しかしながら、こちらの関係者一同 gentlemen は協力的に、必要と思われるすべての図面と注意事項を私に授けてくれるのです[110]。

私はこれらすべてを真実性の地理と称している。なぜなら、ヨーロッパの主だった国すべてにとって、エジプトに精密性と真正性など見出し得ないことは明白だったからである。マリエットは、「現実の」東洋をそこに見出し得なかった者として指摘されるべき、フランス知識人の長い系列に連なるごく最近の一例なのである。ジェラルド・ド・ネルヴァルは、テオフィル・ゴーティエのカイロに関する記述が、パリのオペラ座のための舞台には再現され得なかったことに絶望していた。すなわち「私はそのオペラ座で真のカイロを、私の知らなかった東洋を見出すことだろう」。つまるところ、ミッチェル Mitchell が言うように、「ただパリで見出すオリエント——それ自体、そこから一連の表象が始められるもののシミュレーション——だけが、充分に満足の出来るスペクタクルを与えてくれるのである」[111]。しかし今回は、マリエもまた、いままでパリの*制作室 ateliers* で習慣的に想定されてきたもの customary assumptions には真正性が見出されないであろうことを認識していた。彼は「舞台の上にいつも登場する架空のエジプト人 imaginary Egyptians」は控えたいと心に決めており、それゆえ彼は「素晴らしい想像力の下、エジプトの建造物」を創出し得るフランス人のデザイナーを知っていながら、「必要とされるのはそのようなものではない」と頑なに拒んでいる。真正性は『エジプト誌』の文面にのみ見出され得たのである[112]。

結果は、間違いなく初日の観客を感動させるものであった。そのうちの一人によれば

> 『アイーダ』は歴史的意味 historic import に*忠実な faithful* オペラとして、疑いなく今世紀最も入念な conscientious 作品として、絢爛豪華で真実に即した truthful 風景と威厳ある衣装と堂々たる音楽が折り重なったスペクタクルとして、歴史記述の背景にあって光彩を放つ伝統という尺度にもとづいて記された歴史として、広く受け入れられた。エジプト学者がこの光の中に見るものは実利性 utilitarian と教育的意義 instructive であり、これは詩的破格 poetic license を作曲者が自由にほしいままにしえなかった初めての例であろう…しかし、この成功はひとりヴェルディにのみ帰するものではない。ヘディーヴの特命によってパリを訪れ、衣装の製作過程を見守った、著名なるエジプト学者、マリエット・ベー Mariette Bey もまた賞賛されるべき人物である。ごく*細かな点 minute degree* にいたるまで古代の人々*定番の acknowledged* 衣装を再現して見せたし、舞台背景もまた、*迫真性 fedelity* の如きものを備えて作り上げられていたのである[113]。

そして、ヘディーヴもまた感銘を受けていた。彼は感動のあまり、ヴェルディの住居のあるサント・アガタ Sant' Agata に程近い、マッジオーレ Maggiore 湖岸のヴィラ・ラ・スピーナ Villa La Spina を購入し、その庭園を『アイーダ』の舞台を幻想的に読み換えて風景を整備したほどであった。その結果、この湖畔の村、オッジェッビオ Oggebbio は「リトル・カイロ Little Cairo と呼ばれる観光名所となったのである[114]。

さらに、既に述べたとおり、『エジプト誌』に描かれたエジプトは、幻想のエジプトでもあった。サイードは、掲載されている図版の「壮観なる投影 projective grandeur」が、記述（描写）descrption というよりむしろ帰因 ascription となっていると論じる際、このあたりの点を捉えている。

> 『エジプト誌』に目を通すと、自分が目の当たりにしているのは、あたかも近代的エジプト人などおらず、いるのはヨーロッパ人の見物人だけといった風情の素晴らしく理想的な、埃まみれで古ぼけて人に放り出されてしまったファラオの時代の場所、その線画であり図であり絵画であるということがわかる…『エジプト誌』のなかの最も衝撃的ないくつかの頁は、何かしら非常に大きな出来事や重要人物の登場を懇願しているかのようであり、その広大な空間 emptiness and scale は人々に埋め尽くされるのを待っているオペラの舞台のようでもある。そこに示唆されるヨーロッパ的コンテクストは権力と知の劇場であり、他方で彼らにとっての現実の 19 世紀におけるエジプトという設定は、

単純にいって抜け落ちているのである[115]。

『アイーダ』における裏返しの考古学 reverse-archaeology は、ヨーロッパの聴衆にも向けられたものでもあった。サイードは「まず第一に、このオペラが明らかに決してパリでもミラノでもウィーンでもないある場所のために作曲され企画されている」ことをヴェルディが認識していたと論じ、その不調和と優柔不断さに関する理由をこのことが説明しているのだと述べる[116]。しかしながら、こうした見解に対して私は、このオペラが明白にヨーロッパであった場所のために考案され上演されたものと考える。このことは、ヴェルディの関与の仕方に明らかに見て取れる。彼は一度としてカイロ公演に対して大きな関心を寄せたことはなく、1871 年 12 月 24 日の初演にも姿を現そうとはしなかった。彼はミラノのスカラ座での初演に対してより多くの力を注いでおり、そのためのリハーサルを開始すべく、1 月初旬には現地入りしている[117]。しかしこのことはカイロ公演自体についても言える。サイードが言うように、「東洋化されたエジプト」が上演されたばかりでなく、聴衆もまたその大半がヨーロッパ人だったのである。「…大評判のこの日のオペラを何としても見たいと願う愛好家や芸術家たち」を乗せた専用の汽船が、地中海の主要な港から次々と運行された。初日について、ある批評家が述べたところによると

> 『アイーダ』初演を一目見たいと思うエジプトの人々の好奇心と熱狂は相当なもので、前夜のうちにすべての席が売り切れ、始まる寸前には金の目方ごとにボックス席や一等席が売られるほどであった。エジプトの人々と私は述べたが、これはとりわけヨーロッパ人のことを指している。たとえ裕福であっても、アラブ人たちはわれわれの言うような劇の類には関心を払わない。彼らは自分たちの歌や単調なタンバリンの音にわめき声を上げる miaouing ことの方が好みのようである…。カイロの劇場でトルコ帽 fez を見ることは、まさに奇跡である[118]。

上演されたオペラのなかにいるはずのカイロの一般市民がそのようにしていたのかどうかは私には全くわからない。しかし、この公演も関連する、転移され分散させられた一連のヨーロッパの地理は、その舞台の置かれた都市に『アイーダ』を結びつけたのである。聴衆の一人によると

> 垂れ幕は芸術作品のようで、右側には朽ち果てた寺院やピラミッド、オベリスク、そして霊廟 mausoleums などによって、いにしえのエジプトが表象され、左側には青々と茂る真新しい畑や鉄道、電報に近代農業などが描かれている。これを見ただけで『アイーダ』の目的は見て取れる。つまり、ヘディーヴの進歩的業績の数々を知らしめるということである[119]。

こうした「進歩的業績」は、田舎の景観にも都会の景観にも刻印されている。1873 年に出版されたマレー Murray の『エジプト・ハンドブック Handbook for Egypt』の改訂に携わった編集者は、これまでの十年間に起こった変化を楯に、新版の正当性をこう主張する。

> ヘディーヴがイスマイル・パシャ Ismail Pasha の地位を継承して以来、エジプトの変革は熱狂的なまでの速さで進行した。数百マイルに及ぶ鉄道が敷設され、フルに機能している。電報の回線も国全体に張り巡らされた。アレクサンドリアとカイロの多くの部分が相当な変化を被っており、そのためほんの数年前に訪れたばかりの者でさえ見まがうばかりである[120]。

そして論文の最後の部分でサイードは、外界にあって、揺らめき、人で溢れかえり、ざわついている都市と対峙すべくオペラ座の扉を開く。そこは資本主義的近代の絶望的な苦役がせきたてられる街なのである。サイードは、急激に変化する runaway transformation エジプト経済に関与するヨーロッパの投資銀行家merchant bankers、金融業者 loan corporations、投機家commercial adventures たちの集中について叙述するとともに、カイロが実質的な台風の目になっていることを明らかにしている。彼はこう記す。アレクサンドリアと異なり

> カイロはアラブ人とイスラム教徒の街である…昔のカイロはヨーロッパと容易に交流しはなかったし充分に交流していたわけでもなかった。ギリシアあるいはレヴァントとの親交もなく、穏やかな海風もなければ、地中海に面した慌ただしい港町の暮らしもなかった。カイロの、アフリカやイスラム世界、アラブ人、オスマン世界に対する求心力は、ヨーロッパの投資家たちにとって屈強な障壁のようであり、これをより近寄りやすく魅力的な街にしたいという思いこそが、イズマイルの目論むこの街の近代化を促進したのである。このことは、実質的にカイロを分断すること

であった[121]。

オペラ座は、カイロの近代化の中心であるエズベキア・スクエア Ezbekiah Square にある（図 5）。ここはかつては、毎年ナイル川の氾濫の被害を被っていた広大な空間であった。マレーの報告によれば、かつての古ぼけたスクエアが今では、装飾を施された池や、展望台、洞穴を模した建物 grottoes が配され、異国情緒豊かな木々が植えられた農園に、たっぷりと水を含まされた光輝く芝生、その周囲にはカフェや劇場や野外ステージなどが立ち並ぶといった「…ヨーロッパ風の公園 public garden のようなものとして」レイアウトされている。「これを取り巻く道路は何れも広大なもので、管理も行き届き、ガス灯まで備わっている。歩道もまた幅が広く、傍らには木々が植えられている」。この大規模な再開発は、ヘディーヴが 1867 年に万国博覧会のためパリを訪れたことが発端となっており、その際に彼は、オスマン Hausmann の手になるフランスの首都大改造に大きな賛辞を送ったのであった。彼はスエズ運河開通に合わせて、カイロを「ナイル川に浮かぶパリ Paris-on-the-Nile」へと変貌させる決意を固めていた。彼の精力は西洋の端の都市という点に注がれており、これを彼はイスマイリヤ Ismailiya とでも称されるべき新しい中心地と想定していた。ブーローニュの森 Bois de Boulogne やマルス広場 Champ de Mars の企画にあたったバリエ=デシャン Barillet-Deschamps が、カイロの要となる新しいエズベキア〔公園〕の設計のために招聘された。1869 年、ユージン・フロメンティン Eugene Fromentin はカイロを訪れた際、大規模に取り壊しの進んだこの街を見た彼は、破壊され尽くしたかつてのパリ中心地をさらにひどくしたようなものであったと記している。その 2 年後、気難しい dyspeptic イングランド人、リチャード・ファーガソン Richard Ferguson は、エズベキアは「今や開墾され、排水され、フランス化されてしまった。そこに足でも折りそうな穴が一つ二つ空いているといったエジプト風味で…」と見ている。しかし、1872 年にその地を踏んだもう一人の訪問者、チャールズ・リランド Charles Leland の反応はイスマイルを喜ばせたことであろう。「パリに匹敵する街ではないか」と言明したのであるから。リランドは、かつてのカイロが消えゆくことを嘆き悲しむ人々のことを考えようとはせず、大半の旅行者や観光客とは違って、新しい西洋的な都市のイメージの下、街全体が作り直される日を待ち望んでいたのである[122]。

私はまた、このオペラとオペラ座両者の象徴的重要性は第二帝制下のパリに帰因するのではないかと考えている。結局のところ、なにゆえエジプトのヘディーヴはこれほどまでにヨーロッパの文化的様式に魅了されたのだろうか。サイードは何も語らないが、イスマイルがフランスの首都を訪れた際、グランド・オペラは帝国内の一制度として確立されていたし、数多くの公演とそれに対する浪費が、帝国宮廷の壮麗さとブルジョア文化の洗練とを映し出していた。ガルニエ Garnier の新しいオペラ座建設に向けての作業は、これより 5 年早い 1862 年に開始されており、ペネロープ・ウルフ Penelope Woolf は、この新しい建物が「歴史的正統 historical orthodoxy としてこの時代の根本的な近代性を確立」しようとしていたと論じる。かくして「…オペラ座は、銀行や屋根付き市場や両替所、商品取引所と並ぶ、豊かさと繁栄の指標となったのである」。それはパリのオスマン化の中心に位置し、ある意味ではその最高の栄誉ともなっていた[123]。イスマイルは間違いなく、オペラ座に対する大衆の強烈な関心も新しい都市景観のなかの象徴的重要性も見逃すことは出来なかった。

こうした図像学をカイロに置き換えると、これと同じようなかたちで、『アイーダ』の上演が根本的に近代エジプトの扉を開くものであったがゆえに、オペラ座は新しい都市の境界線を画するものとなっていた。これらは両者ともにヘディーヴの支配力を映し出すものとされていた。カイロのオペラ座が、1875 年まで開館とならなかったガルニエのオペラ座を模したものでなかったことは幸いであった。代わりにここは、2 人のイタリア人建築家によって設計され、スエズ運河開通を記念する『リゴレット Rigoletto』の公演に間に合うようわずか 5 ヶ月で完成されたスカラ座を模していた[124]。サイードが述べるように、それは近代的西洋型都市と向かい合わんがために、伝統的東洋型都市に背を向けたのであった。「その背後には、ムスキ Muski、サイーダ Sayida、ゼイナブ Zeinab、アタバ・アル・カドラ 'Ataba al Khadra といった地区がひしめいているが、オペラ座の圧倒的な大きさとヨーロッパの権威によって押さえ込まれている」。サイードの見解に考慮されているのは、明らかに、そこに繁栄されるヘディーヴ

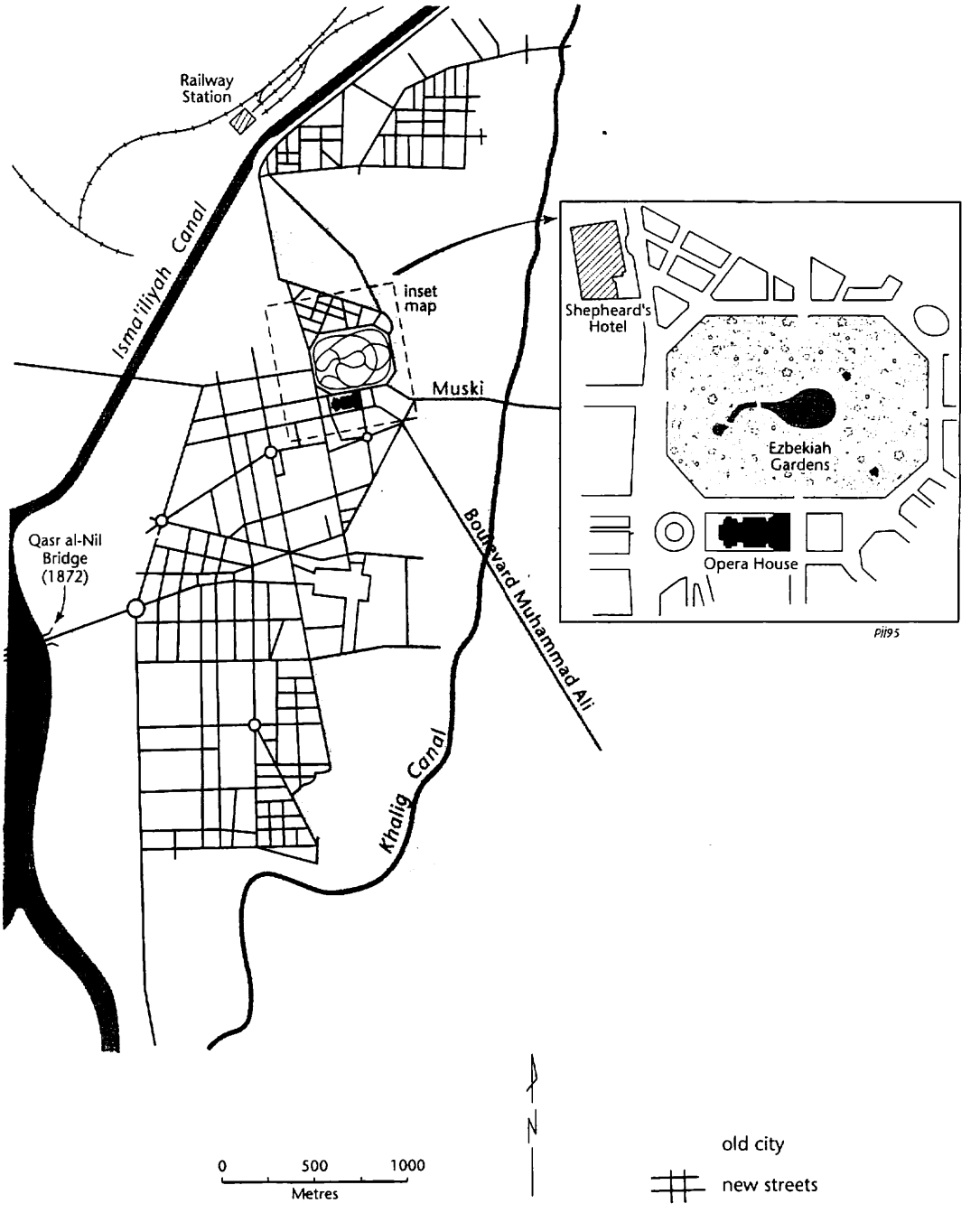

図5　エズベキア・スクエアとカイロ。1871 年頃（アブ＝ルゴードによる）

の栄華ではなく、むしろ屈折したヨーロッパの権力であった。それゆえ彼はこのように結論づけるのである。

> 『アイーダ』におけるエジプト人のアイデンティティは、この街のヨーロッパ的なファサードの一部である。こうしたイメージの壁 imaginary walls の上に刻み込まれた質素さ simplicity と厳格さ rigor とが植民地都市のネイティヴと帝国主義的地区とを分け隔てるのであった。『アイーダ』とは*分離の美 an aesthetic of separation* である。[そして]エジプトの大部分は、実際の目的に付随して起こるようなことを娯楽とする顧客が掛けで買うような帝国主義下の贅沢品 article de luxe であったために…[それは]ほとんど排他的にヨーロッパの聴衆を遠ざけ、感動させるべく企てられた帝国主義的な見世物 spectacle であった[125]。

しかし、私にはこれがファサード以上のものであったように思える。それは遥かに深い文化的領有の過程の一部を担うものでもあった。オペラ座の場合とちょうど同じように、オペラ形式という慣習と『アイーダ』における裏返しの考古学は、エジプトの歴史における光景の流用 a spectacular appropriation という役割を担っており、それゆえに西洋式のホテルや銀行、書店、電報局、そして 1873 年以降はシェパーズ・ホテルの敷地内に設置されたトーマス・クックのオフィスなど、この近代都市の慣れ親しんだ場所もまた、西洋からの訪問者たちがこの伝統的な都市の異国情緒豊かな光景 spectacle を視察すべく繰り出して行けるプラットフォームとなっていたのである[126]。

V ルクソールから学ぶ Learning from Luxor

私はサイードの「地理学再考」の試みを思い起こすことから始めたが、彼の言う心象地理が実質的には、行動地理や環境知覚と関わり続けてきたわれわれの学問の伝統によって見出されたメンタル・マップやイメージなどとは異なるものであることを示せていれば幸いである。彼のものは権力関係と深く絡み合った空間表象をもつ、深くイデオロギー的な景観なのである。それらは、科学技術によってその客観的永続性が明白なものとされている、「より真実に近く、よりリアルな」地理と対峙するものである。なぜなら、例えば、こうした技術はいつでもどこでも技術文化 techno-cutures であるからである。それらは特定の真実の体制と地理に根ざすものでもあり、その表象は部分的なものでもありまた状況づけられた situated ものでもある。しかしながら、ドナ・ハラウェイ Dona Haraway も言うように、状況づけられた知 situated knowledge は理解の妨げというよりはむしろまさにその条件となっているのである。これと全く同じように、また全く同じ理由で、心象地理の地図化が、もしそれが監視や監禁という行為ではなく、折衝された理解の過程として行われるのであれば、「アイデンティティの地図作成cartography of identities」を構成するものだと言うこともできよう（447 頁上段参照）。なぜなら、「己を知る」行為は、「人間が何処に立っているのかを地図化」するということでもあるからである。もちろんサイードはその論考のなかで、西洋側、左翼側の両面から、こうした心象地理の空間性とアイデンティティの不安定且つ部分的な構成との密接な関係について触れている[127]。

しかし、私は、その関係が通常解釈される仕方に関しては留保しておきたいのである。まず第一に、「己を知る」ことにも「人間が何処に立っているかを地図化する」ことにも空間が透明なものであることは示唆されていない。心象地理を、全知の主体 all-knowing subjects の自由で完全な一貫した投影として理解することなどできない。無意識に深く分け入り、地理的心象のなかに刻み込まれた複合的空間性を探求する術を見出さなければならないのである。こうした包含状況 inclusions が、権力と知と地理の支配的布置のなかに、そしてしばしばこの布置によって封じ込められる矛盾に対する分析的な道を開いてくれるのである。サイードの言う対位法的読解にこうした不協和音や「無調性」が記されていなければならないことは何にもまして明白なのであるが、それらを排斥する彼の批判的実践には何も見当たらない。心象地理が社会的に構成された地理的心象へと凝結してしまうその仕方に対して、こうした企図が特別な関心を払っていかなければならない以上、一方の精神分析理論と他方にある社会理論の間の緊張関係を脱して、慎重に作業を進めていく必要があるだろう。しかしながら、既に示したようにサイードの精神分析理論に対する関心は、奇妙なことに先細りとなっている。ときに「明白で manifest」ときに「潜在的な latent」オリエンタリズムに対する間接的言及 allusions、そして『文化と帝国主義』におけるドゥルーズ Deleuze とガタリ Guattari への訴えは、素

晴らしく示唆的でありながら根本的には展開されていないのである。『文化と帝国主義』のなかでファノン Fanon が想起されるとき、その舞台の中央に陣取っているのが、自らの白血病を悟ってわずか 10 週間のうちに書き上げられた『地に呪われたる者』に対する著名な記述である一方で、『黒い皮膚・白い仮面』――バーバ Bhabha はこれに非常に重きを置いているのだが――はといえば、サイードが自らの「初期の心理学的なスタイル」について暗鬱にぼやいている舞台の袖、つまり巻末の注にするすると引っ込んで行ってしまうのである。この対照性は何かの兆候ではなかろうか[128]。それゆえ、私はサイードの留保には首を傾げてしまうのである…

クリップ 1：机の上には、種々の古代の遺物や小立像に囲まれて、テーベ Thebes の街やルクソール、カルナックといった場所に由来するエジプトの神、アモン=レー Amon-Re の彫像が置かれている。診察室の寝椅子の上に掛けられているのは、ラメセス Ramesses に捧げられ、アモン=レーを想起させるアブ=シンベル Abu-Simbel の寺院のカラープリント。ここは、ジークムント・フロイト Sigmund Freud のアパートである。1900 年に初版が発行された彼の古典的著作『夢判断 The Interpretation of dreams』は彼流の「エジプトの夢の書」としてしばしば引用される。彼が古代エジプトの芸術や考古学に魅了されていたことは間違いない。彼の強迫観念について何をしようというのか。最も明白なのは考古学がフロイトに精神分析的実践の言語モデルをもたらしたということである。例えば「アモン=レー」とは「隠れたるもの」を意味し、ことあるごとにアナロジーに関する留保を表明しながらも、フロイトは精神分析の思想を疑似=考古学的な発掘や発表の過程として捉えているように見える。彼は現在における過去の継続的現前、同時にまた予期不能で承認しえない現前というものについても力説しており、「表層意識 surface consciousness」の背後に隠蔽されたこれらのものが白日の下に晒されるような、プシケーの階層化された空間的形象 figure の考古学を展開している[129]。しかし、考古学に言及することでフロイトはまた、目覚ましい成功を収め大好評を博する科学を手中に収めたのである。それは、ともかく演劇的な見かけによって、その他の精神分析という科学への疑念と不信から身を守る覆いのようなものであった[130]。20 世紀初頭に、考古学が一般大衆の間で目を見張るほどの成功を収めたことは疑いの余地がない。カーター Carter、カーナーヴォン Caernarvon を取り巻く熱狂や、1922 年のツタンカーメン墓跡の発見などを思い起こせばよかろう。しかしこれは、西洋の考古学者や探検家たちが大衆の評判を勝ち得るべくナイルの谷での強奪を競い合い、考古学が帝国主義的頂点に達した瞬間でもあった[131]。それでは、フロイトの考古学的隠喩に対して、ひいては彼の思想と実践に対して考古学がもっていた影響力とは何だったのか。彼は一度、親しい友人に次のようなことを打ち明けている。自分は「…まるっきり科学者でもなければ観察者でもなく、実験を行う者でもなければ思想家でもない」のだと。彼は記す。「私はその気質から言って、一介の征服者のようなものである…」[132]。

無論、たった一つの日常的な言葉尻を捕まえて、精神分析理論が永久に逃れることの出来ない植民地主義の衣装をまとっているなどと言うのは愚かなことであろう。私は、ポスト=フロイト派 post-Freudian の様々な形態から、心象地理とアイデンティティの構造との関係を解明する手がかりが得られるのではないか、そしてすでに示唆してきたように、こうした理念が植民地主義と帝国主義*に対する*闘争に参画し得ることをファノンとバーバの業績が示しているのではないかと考えている。しかしサイードは、ファノンの業績がヨーロッパの資本主義文化が生み出してきた理論的練り上げの「屈強さを克服する」、「…セゼール Cesaire の言葉を借りるならば、新たなる精神を築かんがためにそれらを作家たちへと投げ返す」試みであったと述べる。それではファノンもまた精神分析理論に対する闘争を繰り広げていたのだろうか[133]。このことはサイードの躊躇と忌避を示しているのかも知れないし、あるいはまたその植民地主義的徴候に関して、精神分析理論が試されるべきなのかも知れない。なぜなら、少なくともその抑圧された過去 repressed past が、予期されずにまた承認されることもなく、危機的現在 critical present のなかに入り込んでしまう可能性があるからである。

第二に、これはまた私の二つ目の留保でもあるのだが、心象地理の生産――刻印 inscription、競合contestation――といったものを高尚文化の領野に限定することなどできはしないということである。無論、高尚文

化が植民地主義の崩壊から免除されてはいないことを論証することが重要であり、サイードも模範的な手さばきと忍耐をもってこれに取り組んでいるけれども、空間性とアイデンティティとの関係は、そのすべての事項において、日常生活の生産とひと続きのものである。こう主張するのは、抽象化 abstraction やテクスト主義に関してサイードに負っている批評家たちに賛同するからではない。これまで提示しようとしてきたように、オリエンタリズムの空間性とは抽象物であった——*今でもそうなのだが*——し、それらが語られる権威あるテクスト canonical texts は、身体性 corporealities と物体性 Physicalities をその特質としている。簡単に言えば、サイードの業績には唯物論が見て取れるということである。彼自身、われわれは物質ばかりでなく表象の世界にも生きているのだと記しており、これらは同時に抽象物であり*また*濃密なまでの具体的な構成体 densely concrete fabrications でもある[134]。しかしながら、20 世紀後半、商品と表象はかつてないほど複雑な形態へと織り込まれており、そのことに関してサイードがうまく理解出来ていないのは、これらの連結組織が高尚文化と大衆文化の間に、全体的に解体されないまでも、(もう一つの)「大区分 great divide」を要求しているということである。そうすることで、それらは、過去を再訪 revisiting し再=現前させる re-presenting ことで、過去の現在との関係を改訂し reworked するのだ。しかし多くの場合は、過去を再=想像している re-envisioning に過ぎないものと私には思われる。人はこれを、ラファエル・サミュエル Raphael Samuel が細心の注意を払いながら訪れた文字どおりの「追憶の劇場 theatres of memory」で、そして学界の内外を問わず高まった視覚文化の歴史に対する空前絶後の関心のうちに見ることであろう[135]。

クリップ 2：ルクソールのピラミッドは、砂漠の表面から揺らめく青空に向かって 350 フィートの高さへと駆け上る。その入り口は巨大なスフィンクスによって守られている。その向こうには空にそびえるカルナック Karnak 寺院のオベリスクが聳えている。ツタンカーメンの墓跡の内にあるのは、金の石棺、魔除けのお守り amulets、仮面、そして暗闇の中にかすかに光るオオタマオシコガネ scarabs。外側には、ナイル川のクルーズを楽しむ観光客を満載した船、そして彼らはロビーからエレベーターに乗ってカジノへ向かう。実際にはこの砂漠はモハベ砂漠であり、オベリスクと墓跡はレプリカで、ナイル川は人工的に作られたものである。そして、ルクソールはラス・ヴェガスの商店街に開業する最も新しいホテルの一つである。この「娯楽型超大店舗 entertainment megastore」は、サーカス・サーカス・エンタープライズ社 Circus Circus Enterprise が経営するもので、この開業に当たっては、ある新聞は次のような見出しをつけた。「古代文明、ラスヴェガスで発見」。ルクソールは「古代エジプトの神秘が建物の内部空間全体を通じて『発掘 excavation』が進められているかのように現された、広大な考古学的発掘現場と」理解される。ツタンカーメンの墓跡は、カーターやカーナーヴォンによって「発見された」ものであるがゆえに、場所の再生産なのであり、室内の測定は「正確に」なされ、工芸品はかつての職人と変わらぬ同じ素材と手順をもって再生産され、それぞれが「…カーターの記録に沿って細心の注意を払いながら配置されている」。興業者たちの意図は、彼らが主張するところによると、「搾取することではなく敬意を表することである」。そことはどちらかというと異なったかたちのオマージュを風潮とするカジノでは、古代エジプトはルクソールやカルナックの寺院からの再生産品によって「活気付いている」。「世界の次なる不可思議」、「3,000 年間で最も記念碑的な達成」、または、おそらくはコピーライターが心に思い描いたものよりも真実に近いに違いない、「歴史が再び記されようとしている」場所といった広告が打たれ、このリゾートには、ピラミッド内部の斜面を駆け上がって特大の客室に向かう「愛好家たち」が溢れかえることとなるのである。「…時を越えて皆さんの現実感覚を逆転させること」間違いなしと言い切る『ブレード・ランナー』の特殊効果デザイナーによって考案されたアドヴェンチャー・エンターテイメント。エジプトの鑑定書付き古代美術品を扱う画廊やブティック。「かつてのファラオたちの祝宴の雰囲気が味わえる料理」のみならず、おそらくはユダヤ人たちの帰還を促すためのものであろう「…ナイル川沿いのユダヤ風デリカテッセン a Kosher-style deli」等も供されるテーマ・レストラン。そして仕上げは、「空跳ぶミイラ」と題された、ピーター・ジャクソン Peter Jackson 率いる白いリンネル布に身を包んだ曲芸団のフロア・ショーに、「絢爛豪華なダンスの数々、ベリー・ダンス、興奮の nail-biting

スタント、そして独創的特殊効果」と続く。このような公演は「…その安息の地を盗賊の一団に冒涜されし遠き日のファラオ」[136]の物語をわれわれに教えてくれる。

私はロサンゼルスのボナヴェンチャー・ホテルBonaventure Hotel でのフレデリック・ジェイムソン Frederic Jameson の冒険旅行 odyssey を真似て馬鹿にするつもりはない。しかし、『エジプト誌』を下敷きに作成され、ヴェルディの『アイーダ』の上演を通じて継続している道筋 itinerary にルクソール・ラスヴェガスを位置づけてみる situate ことは、植民地主義的過去と新植民地主義的現在との相互浸透をルクソールの心象地理がいかなるかたちで演じているかということを示してくれるのである。そこには、販売促進用コピーに見られる訳知り顔の諧謔や、視覚化と領有の間にある博覧会としての世界 the world-as-exhibition のなかに据えられた植民地主義的連関の再提示 re-presentation のパロディがあるのかも知れない。しかし、こうした幻想の構築物 fantasy-architecture は、それでもやはり、特定の空間性が捉えられ、転移され、えぐり抜かれた、さらにそれによってアイデンティティが合わせられ、交渉を経て、論争される、物理的な場 a physical site を提供するのである。

私は意識的に映画に纏わる用語を用いたのであるが、これまで提示してきた二つのクリップから、ここに至る数頁の中で私が記してきた歴史地理がわれわれの現在に至る新たな頁を開いていることは明白なものと思う。20 世紀後半の文化的地理に対する批判的読解さえ過去に背を向けることは出来ないのである。200 年前、フランス軍がピラミッドを巡ってマムルークと戦いを繰り広げるよりも以前に、ナポレオンは、「…これらの遺跡の高見に立って考えるがよい。4,000 年の歴史がわれわれを見ているではないか」との達しをもって側近を罷免している。ロバート・ヤング Robert Young の著名な論考、『白人の神話学：歴史の記述と西洋 White mythologies: writing history and the west』は、表紙にピラミッドを振り返り見上げる前エジプト大統領、アンヴァール・サダト Anwar Sadat の写真を掲載している。そこには、地理の記述に関してもわれわれ自身の心象地理の生産についても学ぶべきことが示されているのである。

謝辞

本稿は 1995 年 3 月、シカゴで開かれたアメリカ地理学者協会年次大会における、プログレス・イン・ヒューマン・ジオグラフィー主催の講演を下敷きとしている。貴重なコメントを頂いた、アリソン・ブラント、ノエル・カストゥリー、ダン・クレイトン、フェリックス・ドライヴァー、コール・ハリス、ジェニファー・ヒンドマン、デイヴィッド・レイ、リン・ステュワート、ジョアン・シュウォルツ、ジョアンヌ・シャープ、そして、ブルース・ウィレムズ=ブラウンに心から感謝の辞を呈したい。

注

1. Said, E. 1994: Edward Said's *Culture and imperialism*: a symposium. *Social Text* 40, 21.
2. Fox, R. 1992: East of Said. In Sprinker,M., editor, *Edward Said: a critical reader*. Oxford: Blackwell, 144-56. 引用は 144 頁より。Gilroy, P. 1993: Travelling theorist. *New Statesman and Society* 12 February, 46-47. 他の幾人かと見解をともにしてはいても、ギルロイの、ポストモダニズムに関するサイードの研究への暗黙の同化は紛らわしい。サイードがモダニズムの危機について何かを語っているからと言って、――また帝国主義との重なり合い imbrications によってもたらされることになったとりわけ転置 dislocations と転位 displacement について: Said, E. 1993: *Culture and imperialism*. New York: Alfred Knopf, 186-90 を見よ――それによって彼をポストモダニストとすることはできない。事実、サイードはメタ物語へのポストモダン的な攻撃に関する彼の最も痛烈な批判のいくつかを変えずにいる。「知識人たる者の活動目的は人間の自由と知識をより前へと進めていくことである」と彼は強調する。そしてリオタールと彼の追随者たちが「解放と啓蒙という大きな物語」をしりぞけるその時に、彼らは「ポストモダニズムにもかかわらず」残された政治的=知的な異議申立てとその機会を認めるよりはむしろ「彼ら自身の怠惰な無能さ」を認めているのだ、とサイードは言う。Said, E. 1994: *Representations of the intellectual*. London: Vintage, 13-14. (大橋洋一訳『知識人とは何か』平凡社)。
3. Said, E. 1995: *Orientalism*. Harmondsworth; Penguin Books (1st edn, 1978), 215. (今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社)。
4. しかし Driver, F. 1992: Geography's empire: histories of geographical knowledge. *Environment and Planning D: Society and Space* 10, 23-40; Rogers, A. 1992: The boundaries of reason: the world, the homeland and Edward Said. *Environment and Planning D: Society and Space* 10, 511-26 を見よ。
5. Said, *Orientalism*, 215-18; Driver, Geography's empire; Livingstone , D. 1993: A 'sternly practical' pursuit: geography, race and empire. In *The geographical tradition: episodes in the history of a*

contested enterprise. Oxford: Blackwell, 216-59; Godlewska, A. and Smith, N. editors, 1994: *Geography and empire*. Oxford and Cambridge, MA: Blackwell.

6. Smith, N. 1992: Real wars, theory wars. *Progress in Human Geography* 16, 257－71.

7. こうした見積もりには不可避的に議論の余地がある。すなわち国連とパレスチナとイスラエルの資料とでは皆異なっているのである。Hadawi, S. 1989: *Bitter harvest: a modern history of Palestine*. New York: Olive Branch Press; Tessler, M. 1994: *A history of the Israeli- Palestinian conflict*. Bloomington IN: Indiana University Press を見よ。

8. Said, E. 1966: *Joseph Conrad and the fiction of autobiography*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

9. Said, *Orientalism*, 25.

10. サイードは「…徐々に西洋へと入っていき、その後「航海してきたもの」として「承認を要求するような、周縁の、離心的な労働の」生産力について記述している。(*Culture and imperialism*, 216, 239) . Cf. Robbins, B. 1994: Secularism, elitism, progress and other transgressions: on Edward Said's 'voyage in'. *Social text* 40, 25-37.

11. Said, E. 1986: *After the last sky: Palestinian lives*. New York: Pantheon Books, 115. (島弘之訳『パレスチナとは何か』岩波書店)

12. Said, *After the last sky* 14; Wicke, J. and Sprinker, M. 1992: Interview with Edward Said. In Sprinker, editor, *Said*, 221-64; 引用は222頁より。そこでサイードは、彼自身のカイロの「心象地理」を素描している。心象地理と想像の共同体の間には、現在アンダーソンが認めているように、重要な境界が存在しているが、彼の議論は離散させられ置換させられた国民 national 共同体の特別な窮状を考慮に入れて再考される必要がある。Anderson, B. 1991: *Imagined communities: reflections on the origin and spread of nationalism*. London: Verso (2nd edn) .

13. 強奪と追放の文化およびその地理学との重なり合いに関するより広範な議論については――奇妙にもサイードについて取りたてて言及してはいないのだが――Parmenter, B. M. 1994: *Giving voice to stones : place and identity in Palestinian literature*. Austin, TX: University of Texas Press を見よ。ここで引用した詩は 'We travel like other people' and 'The earth is closing in on us', reprinted in Darwish, M., al-Qasim, S. and Adonis, 1984: *Victims of a map*. London: Al Saqi Books である。その他の引用は Said, *After the last sky*, 6, 17 からのもの。また Rushdie, S. 1993: On Palestinian identity: an interview with Edward Said. In *Imaginary homelands: essays and criticism 1981-1991*. Harmondsworth: Penguin Books, 166-84 も見よ。

14. Said, *After the last sky*, 19-21, 38. Rogers, *Boundaries*, 521 は、サイードの言語が、ポストモダン的状況の荒涼さを暗示しており、そしてその経験が普遍的なものでなく特殊なものであること――「『我々』とはすべてのパレスチナ人などではない」――を主張していると述べ、また、サイードにとって、こうした転置と離散とは「…快諾されるものなどではなくむしろ抵抗するために戦われるものなのだ」と論じているが、まさしくそうである。

15. Said, *After the last sky*, 12.

16. Dimbleby, J. 1979: *The Palestinians*. London: Quarter Books.

17. Said, *After the last sky*, 28.

18. シカゴで、エドワード・ソジャは彼が私の発表の下書きとなっているとみた「歴史主義」の解毒剤としてこの問題について考えてみるよう私に促したが、しかしながら、歴史主義とは通常、歴史を目的 telos と見なすことを意味するものである。私はこれを私の議論（ないしはサイードの企図）の正しい性格付けだとは思わない。ソジャが警戒しているのは、地理に対する歴史の特権化である。しかし私はサイードの業績のもつ力は、二つのことを一緒に思考することの出来る彼の並外れた能力に由来していると確信している。確かに彼は歴史的調査の重要性にけちをつけたりはしない。彼が例えば「記憶、さらに重要なのは、理念、政治的・人間的経験、また持続する民衆の意志による行動である以外に、パレスチナは存在しない」と結論するとき、確かに彼は、同時代の政治のため、継続する過去の突出――イメージ的にも、文化的にも、批判的にも――に関心を引き付けつづけている。Said, E. 1979: *The question of Palestine*. New York: Times Books, 5 を見よ。サイードが時間的な継起よりも空間的対位法の重要性を強調することもある。が、それは類似性、影響、連接に関する議論であって、そこでも歴史性の意義が落しめられることはないのである。*Culture and imperialism*, 81 を見よ。

19. Said, E. 1994: Return to Palestine－Israel. In *The politics of dispossession: the struggle for Palestinian self-determination 1969-1994*. New York: Pantheon, 175-99.

20. Said, E. 1993: An interview with Edward Said. *Boundary* 2, 1-25。引用は pp. 12-13 より。

21. Bhabha, H. 1994: *The location of culture*. London: Routledge, 99-100.

22. これらの政治的関与についてのサイード自身の語りは Said provides his own narrative of these engagements in *Politics of dispossession*, i-xxxiv の中に収められている。サイードは 1977 年から 1991 年までパレスチナ国民評議会 the Palestine National Council のメンバーであった。これに関わるレヴューとコメントについては、Hovsepian, N. 1992: Connections with Palestine. In Sprinker, editor, *Said*, 5-18 参照。

23. Hulme, P. 1990: Subversive archipelagos: colonial discourse and the break - up of continental theory. *Dispositio* 15, 1-23. 『大陸的理論』という語によって、ハルムは、マルクス、ニーチェ、フロイトによって三角測量される戦後の言説的地平――その起源とその推定される普遍性の双方において明瞭にヨーロッパ的である――を意味している。

24. Smith, N. 1994: Geography, empire and social theory. *Progress in Human Geography* 18, 491-500; 引用は pp. 492-93 より。

25. Said, *Orientalism*, 80-87; *Culture and imperialism*, 33-35.

26. Said, B. 1993: The empire at work: Verdi's *Aida*. In *Culture and*

imperialism, 111-32.

27. Gregory, D. 1995: Between the book and the lamp: imaginative geographies of Egypt, 1849-50. *Transactions, Institute of British Geographers* 20, 29-57 を見よ。

28. Said, E. 1991: *Musical elaborations*. New York: Columbia University Press, 17（大橋洋一訳『音楽のエラボレーション』みすず書房）; *Culture and imperialism*, 109.

29. 南アジアについては Breckenridge, C. and van der Veer, P., editors, 1993: *Orientalism and the postcolonial predicament: perspectives on south Asia*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press を見よ。「オリエンタリズム」と南アメリカについては、'Symposium', 4-6 における Mary-Louise Pratt の注意を参照。

30. Lowe, L. 1991: Discourse and heterogeneity: situating orientalism. In *Critical terrains: French and British Orientalism*. Ithaca, NY: Cornell University Press, 1-29. 社会理論や精神分析理論の語彙が示すように、「矛盾」を概念化するための方法は多様である。ここでそのどれかを特権化しようとは考えない。

31. Barrell, J, 1991: *The infection of Thomas de Quincey*: a psychopathology of imperialism. New Haven, CT: Yale University Press, 16.

32. Lant, A. 1992: The curse of the pharoah, or how cinema contracted Egyptomania. *October* 59, 86- 112. p. 98 から引用。

33. Said, E. 1986: Foucault and the imagination of power. In, Hoy, D. C., editor, *Foucault: a critical reader*. Oxford: Blackwell, 149-55. 無論私は、フーコー一人だけがその典拠であるなどと主張しているわけではない。しかし、いずれ明らかにされる理由から、『オリエンタリズム』ではフーコーは「端役」でしかないとするブレナンの評価に――それ以外では魅力的なのだが――私は賛成しない。Brennan, T. 1992: places of mind, occupied lands: Edward Said and philology. In Sprinker, editor, *Said*, 74-95.

34. サイードに対する批判については Clifford, J. 1988: *Orientalism*. In *The predicament of culture: twentieth- century ethnography, literature and art*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 255-76; Young, R. 1991: Disorienting orientalism. In *White mythologies: writing history and the west*. London: Routledge, 119 - 40 を見よ。フーコーの自己の倫理学についての批判的議論については、McNay, L. 1992: *Foucault and feminism: power, gender and the self*. Cambridge: Polity Press を見よ。

35. Ahmad, A. 1994: *Orientalism* and after: ambivalence and metropolitan location in the work of Edward Said. In *In theory: classes, nations, literatures*. London: Verso, 159-219; 特に pp. 165-66 を見よ。 アフマッドの信仰主義――「彼／女ら自身マルクス主義者であることを明らかにしない批判者に対する」彼の「激怒」――については、B. 1993: A critique mishandled. *Social Text* 35, 121－33; Levinson, M. 1993: News from nowhere: the discontents of Aijaz Ahmad. Public Culture 6, 97-131 を見よ。

36. Said, *Orientalism*, 57, 122; また pp. 42- 43, 76, 87, 120, 201 も見よ。前近代のオリエンタリズムの系譜については、Hentsch, T. 1992: *Imagining the midle east*. Montreal: Black Rose Books を見よ。

37. Said, *Orientalism*, 54.

38. Said, *Orientalism*, 55; Bachelard, G. 1969: *The poetics of space*. Boston, MA: Beacon Press. （岩村行雄訳『空間の詩学』思潮社）

39. Said, E. 1995: East isn't east: the impending end of the age of Orientalism. *The Time Literary Supplement* 3 February. 強調は筆者による。

40. Geyer- Ryan, H. 1994: Space, gender and national identity. In *Fables of desire: studies in the ethics of art and gender*. Cambridge: Polity Press, 155-63. 被追放者――「彼／女らが悲惨にすぎる重荷を負っているとはいえ」――についてそれほど触れずに、「移民者と向き合いそして他者との出会いを通じた象徴秩序の恣意性や相対性を経験する」者たちについてむしろ多く述べているガイア=ライアンの論点を私は転移させている。

41. サイードによる「明白な」オリエンタリズムと「潜在的な」オリエンタリズムの区別は精神分析理論の刃の上で震えているが、これはまだ彼の研究では展開されていない。詳細な説明 elaboration のひとつとして Bhabha, *Location of culture*, 71-75 を見よ。

42. 無論、この対立は不可避のものではない。そしてジェラルド・オトゥアセイルの研究は、批判的地政学が精神分析理論によって理論化され得るであろういくつかの方法を特に示すものである。

43. Said, E. 1984: Criticism between culture and system. In *The world, the text and the critic*. London: Faber & Faber, 178－225（山形和美訳『世界・テクスト・批評』法政大学出版局）、pp. 219-22 より引用。バシュラールとフーコーの間には重要な系譜関係があるが、これらはフーコーの、サイードがここで試みている系譜学よりはむしろ考古学のなかに存在している。

44. Said, E. 1988: Michel Foucault, 1926－1984. In Arac, J., editor, *After Foucault*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press, 1-11; p. 5 より引用。

45. Foucault, M. 1961: *Folie et déraison: histoire de la folie a l'âge classique*. Paris: Librairie Plon, iv（田村俶訳『狂気の歴史: 古典期主義時代における』新潮社）; この箇所は英語の改定・簡約版の翻訳本 *Madness and civilization*(New York: Pantheon, 1965）では削除されている。本の結びにおけるフーコーのイメージは、いまだ英語に翻訳されてはいない 'son hiératisme tragique'といったものである。'hiératisme' は通常、聖なる伝統の感覚を意味するが、また象形文書の単純化された形式を参照する際にも用いられる。

46. Foudault, M. 1970: *The order of things*. London: Tavistock, xv-xix（『言葉と物』新潮社）; Foucault, M. 1986: Of other spaces. *Diacritics* 16, 22-27.

47. Said, *Orientalism*, 186-88, 207-208.

48. Said, *Culture and imperialism*, xxv.

49. Said, *Criticism*, 222.

50. Foucault, M. 1979: *Discipline and punish*. New York: Vintage

Books, 140-41（田村俶訳『監獄の誕生』新潮社）.

51. Martin, A. 1988: *The knowledge of ignorance*. Cambridge: Cambridge University Press, 81.

52. Said, *Orientalism*, 80- 85. エジプトでの調査については、Laurens, H., Gillispie, C., Golvin, J. - C. and Traunecker, C. 1989: *L'expédition d'Égypte 1798 - 1801*. Paris: Armand Colin を見よ。パリにおける出版の企画については、Albin , M. 1980: Napoleon's *Description de l'Égypte*: problems of corporate authorship. *Publishing History* 8, 65- 85 を見よ。

53. Said, Criticism, 223: *Orientalism*, 162, 186.

54. Rajchman, J. 1991: Foucault's art of seeing. In *Philosophical events: essays of the 80's*. New York: Columbia University Press, 68-102; また、Flynn, T. 1993: Foucault and the eclipse of vision. In Levin, D. M., editor *Modernity and the hegemony of vision*. Berkeley, CA: University of California Press, 273-86 も見よ。

55. Foucault, *Discipline and punish*, 217; 鷲は無論ナポレオンであり、太陽はルイ一四世である。

56, Rose, G. 1993: Looking at landscape: the uneasy pleasures of power. In *Feminism and geography: the limits of geographical knowledge*. Cambridge: Polity Press, 86-112; マスキュリニズム（男性性主義）とオリエンタリズムに関する議論については、Kabbani, R. 1986: *Imperial fictions: Europe's myths of Orient*. London: Macmillan を見よ。

57. Boone, J. 1995: Vacation cruises, or the homoerotics of Orientalism. *Publications of the Modern Language Association* 110, 89-107; また Gundermann, C. 1994: Orientalism, homophobia, masochism. *Diacritics* 24, 151-68 も見よ。

58. 例えば、Gillies, J. 1994: Theatres of the world. In *Shakespeare and the geography of difference*. Cambridge: Cambridge University Press, 70-98; Lestringant, F. 1994: Ancient lessons; a bookish Orient. In *Mapping the renaissance world: the geographical imagination in the age of discovery*. Cambridge: Polity Press, 37-52 を参照。

59. Said, *Orientalism*, 63, 103, 127, 166. 博覧会としての世界については、Mitchell, T. 1988: *Colonising Egypt*. Cambridge: Cambridge University Press; Mitchell, T. 1992: Orientalism and the exhibitionary order. In Dirks, N., editor, *Colonialism and culture*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press, 289-317 を見よ。

60. 芸術史におけるオリエンタリズムに関する文献は今や豊富である。例えば、Nochlin, L. 1989: The imaginary Orient. In *The politics of vision: essays on nineteenth- century art and society*. New York: Harper& Row, 33-59 を見よ。だが私は、少なくとも二つの理由から、19 世紀の写真の方がサイードの議論にとってはより一層重要なのではないかと考えている。第一に、写真術は帝国主義と細部の規律=訓練をともに引き出しつてくる仕方で決定的な真実というイデオロギーを要約する。ソロモン=ゴドーが記しているように「19 世紀中葉は、分類学、明細目録作成、生理学にとって偉大な時期であった。そして写真術は、あたかも世界の諸事物をリスト化し、知り、所有するための、すぐれたエージェントとして理解されたのであった」。エジプトを撮ったカロタイプ師のなかで最も良く知られたうちの一人フェリックス・テイナール Félix Teynard は、『エジプト誌』を補うものとして、エジプトのモニュメントに関する彼の系統的な調査を宣伝したほどである。第二に、純粋に技術的な理由から、カロタイプ師たちは動きの無い光景——とりわけ建物の外観——を対象とし、そして「本質的に空虚な空間」としてそれらを描いたのであった。「そうした——世界の多くを空虚なものとして示すような——写真による証拠記録が、無意識的に、帝国の拡大のための正当化に同化していたと仮定することは道理に適っているのである」。Solomon- Godeau, A. 1991: A photographer in Jersusalem, 1855: Auguste Salzmann and his times. In *Photography at the dock: essays on photographic history, institutions and practices*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press, 150－68 を見よ。引用は pp. 155, 159;から。また Howe, K. 1994: *Excursions along the Nile: the photographic discoverry of ancient Egypt*. Santa Barbara, CA: Santa Barbara Museum of Art も見よ。

61. この口絵はそれに添えられた説明とともに Gillispie, C.C. and Dewachter, M., editors 1987: *Monuments of Egypt: the Napoleonic editoin*, Princeton, NJ: Princeton Architectural Press に翻刻されている。

62. このことは植民地的言説ではありふれたことである。Pratt, M.L. 1992: *Imperial eyes: transculturation and travel writing*. London: Routledge を見よ。しかしこの折衝の言説はエジプトにおける特別な戦略を必要とする。というのも、明らかにそれは「歴史を持たない人々」として住民を排除しつづけることを通しては進行し得ないからである。目的のすべてはヨーロッパの歴史の序文としてまた＜一部として＞（古代の）歴史を利用し回復することにあったのである。このことは結果として過去の人種主義化を許してしまった。それによって古代エジプトの人々は、現代エジプトの多くの住民とは異なって、白人——そして原ヨーロッパ人——と仮定されるのである。

63. Cosgrove, D. 1985: Prospect, perspective and the evolution of the landscape idea. *Transactions, Institute of British Geographers* 10, 45-62.

64. Prochaska, D. 1994: Art of colonialism, colonialism of art: the *Description de l'Égypete (1809-1828)*. *L'Esprit créateur* 34, 69-91; 「視線の組織化」については Mitchell, *Colonising Egypt*, 12 を見よ。『エジプト誌』制作に伴われた地理的装置に関する素晴らしく入念な解説として、Godlewska, A. 1988: The Napoleonic survey of Egypt. *Cartographica* 25, monograph 38-39; Godlewska, A. 1994: Napoleon's geographers (1797-1815) : imperialist soldiers of modernity. In Godlewska and Smith, editors, *Geography and empire* を見よ。

65. Laurens et al., L'expédition, 352-53; サイード（*Orientalism*, 88）は、それ以降引き続きオリエントを「その外に彼らが生み出されるある種の子宮」と考えるヨーロッパの作家たちによって生産された「高度に様式化されたシミュラークル、精密に加工されたイミテーション」を同定するとき、

ほぼ同じ点について語っている。

66. Godlewska, A. 1995: Map, text and image: representing the mentality of enlightened conquerors. *Transactions, Institute of British Geographers* 20, 5-28.

67. Said, *Culture and imperialism*, 118.

68. Philo, C. 1992: Foucault's geography. *Environment and Planning D: Society and Space* 10, 137-61.

69. 19 世紀のパリを思い描くには、Asendorf, C. 1993: *Batteries of life: on the history of things and their perception in modernity*. Berkeley, CA: University of California Press, 46-47; Clark, T.J. 1984: The view from Notre Dame. In *The painting of modern life: Paris in the art of Monet and his followers*. Princeton, NJ: Princeton University Press; Green, N. 1990: *The spectacle of nature: landscape and bourgeois culture in nineteenth-century France*. Manchester: Manchester University Press, 29-31; Prendergast, C. 1992: *Paris and the nineteenth century*. Oxford: Blackwell を見よ。相似すると私が思っているものは、Behdad, A. 1994: Notes on notes, or with Flaubert in Paris, Egypt. In *Belated travelers: Orientalism in the age of colonial dissolution*. Durham, NC: Duke University Press, 53-72、また Shields, R. 1994: Fancy footwork: Walter Benjamin's notes on *flanerie*. In Tester, K., *The flaneur*. London: Routledge, 61-80 において触れられている。

70. Said, *Culture and imperialism*, 99-100.

71. Said, *Politics of dispossession*, 416-17; Said, 1995: Symbols versus substance a year after the Declaration of Principles: an interview with Edward Said. *Journal of Palestine Studies* 24, 60-72.

72. マルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』のエピグラフ参照。サイードは『オリエンタリズム』の冒頭にこれ――「彼らは、自分で自分を代表（再現-表象）することができず、だれかに代表（再現=表象）してもらわなければならない」――を使っている。

73. Said, *After the last sky*, 116.

74. Colley, L. 1993: The imperial embrace. *Yale Review* 81, 92-98; 引用は p. 92 より。強調は筆者。

75. Said, *Culture and imperialism*, 63.

76. Said, *Culture and imperialism*, 239.

77. Silverman, D. 1977: The 1889 exhibition: the crisis of bourgeois individualism. *Oppositions* 8, 70-91. この博覧会はまた the first Rue du Caire を包含してもいた。Mitchell, *Colonising Egypt*, 1-4; Celik, Z. 1992: *Displaying the Orient: architecture of Islam at nineteenth-century world's fairs*. Berkeley, CA: University of California Press を見よ。事実、モーパッサンは彼のアパートで、博覧会のためにパリに滞在していた「アラブ舞踊家、アクロバット師、音楽家たちの一隊」をもてなしたのであった。Steegmuller, F. 1950: *Maupassant*. London: Collins, 279.

78. *Egypt and how to see it*. Paris Hachette, London: Ballantyne, 131

79. Colley, Imperial embrace, 94; Said, *Culture and imperialism*, 74, 189. 無論サイードは一般的には高尚文化についてそして特殊には小説について語っているのである。他の二つの文化的産物は、心象地理の植民地的構築と流通に特別な重要性を有している。旅行記と植民地主義の間にねんごろな結びつきのあることは、啓発的研究の流れにおいて示されている。例えば、Blunt, A. 1994: *Travel, gender and imperialism: Mary Kingsley and West Africa*. New York: Guilford Press; Mills, S. 1991: *Discourses of difference: an analysis of women's travel writing and colonialism*. London: Routledge; Pratt, *Imperial eyes*; Spurr, D. 1993: *The rhetoric of empire: colonial discourse in journalism, travel writing and imperial administration*. Durham, NC: Duke University Press を見よ。映画の登場と帝国主義の時代との結びつきは今一つ関心を呼んではいない。だが、Browne, N. 1989: Orientalism as an ideological form: American film theory in the silent period. *Wide Angel* 11, 23-31; Lant, Curse of the pharoah; Shohat, E. and Stam, R. 1994: *Unthinking eurocentrism: multiculturalism and the media*. London: Routledge を見よ。

80. Said, *Culture and imperialism*, 82-83.

81. Said, *Culture and imperialism*, 84.

82. Cohen, M. 1993: *Le diable à Paris*: Benjamin's phantasmagoria. In *Profane illumination: Walter Benjamin and the Paris of surrealist revolution*. Berkeley, CA: University of California Press, 217-59.

83. Polan, D. 1994: Art, society and 'contapuntal criticism': a review of Edward Said's *Culture and imperialism*. *Clio* 24, 69-79; 引用は pp. 73, 75 より。「帝国主義的イデオロギーの必要」に対するポランの主張はサイードの議論が保証する以上に機能主義的なものであるが、本質的な点では有効である。サイードとは対照的に、ベフダッドは、彼が「それがその意識の中に抑圧する暴力を対象なるものが引っ込めたり顕わにしたりすることを暴露する」ような植民地的言説の「追憶的読解」と呼ぶものについて論じている。しかしこの批判的戦略が歴史性を特権化している限りおいて、サイードの主たる関心事である*地政学的*暴力はあいまいにされたままである。 Behdad, Belated Orientalism, 8 を見よ。

84. Said, *Culture and imperialism*, 278 参照。また Young, *White mythologies*. も見よ。それにもかかわらず、ベニタ・パリーは「搾取と威圧とが消去される理想化されたこの世の未来をもたらすような人間の主体的行為の可能性に希望を抱く社会主義的プロジェクトを秘密裏に共有するもの」としてサイードを描いている。私はサイードがまったくそのように考えているかどうか確信出来ないが、彼の近年の著作は啓蒙のプロジェクトの（限定的な）回復によって、また宗主国のアカデミーにおけるポストモダニズム、ポスト・マルクス主義、そしておそらくは他の何よりも「ポスト植民地主義」から彼が距離をとるところのその真理・理性・解放の価値の肯定によって特徴づけられる。 Parry, B. 1993: Imagining empire: from *Mansfield Park* to Antigua. New Formations 20, 181-88; Norris, C. 1994: *Truth and the ethics of criticism*. Manchester: Manchester University Press, 67-69, 110-12 を見よ。

85. Sald, *Culture and imperialism*, 14. ウィリアムズがウェールズの出自であることの重要性を所与とするサイードの批判は、それ自体奇妙にずれている。だがより広範な主張は有効である。また Viswanathan, G. 1993: Raymond Willllams and British

colonialism: the limits of metropolitan theory. In Dworkin, D. and Roman L., editors, *Views beyond the Border Country: Raymond Williams and cultural politics*. London: Routledge, 217-30; Radhakrishnan, R., 1993: Cultural theory and the politics of location. In Dworkin and Roman, editors, Views, 275-94 も見よ。

86. Williamas, R. 1973: *The country and the city*. London: Chatto & Windus (『田舎と都会』晶文社) ; Said, E. 1984: Secular criticism. In *The world the text, and the critic*, London: Faber&Faber, 1-30; the quotation is from p. 23; Said, *Culture and imperialism*, xxvii, 14, 52.

87. Said, E. 1984: Reflections on American 'left' literary criticism. In *The World, the text and the critic*. London: Faber&Faber, 158-77; 引用は p. 171 より。

88. Said, *Culture and Imperialism*, 48, 59.

89. Said, *Culture and imperialism*, 49. エドワード・ソジャは「グラムシの地理学」をめぐって同様の論を展開している。「グラムシは西洋マルクス主義の他の創設者たち以上により一層空間的観点を有していた」。 Soja, E. 1989: *Postmodern geographies: the reassertion of spece in critical social theory*. London: Verso, 46n.

90. Said, *Culture and imperialism*, 35. サイードはその後、20 世紀の終焉にはこうした連結と転置の重要性が高まるものと論じている。そうすることで彼はヴィリリオやドゥルーズとガタリ、その他の人々による——過去と現在の間に根底的な亀裂を入れることを目的とする——「宿無しの脱中心化された」政治的・知識人的定式化と、「帝国主義の文化地図を示す重合する領域における緊張・優柔不断・矛盾…」を分節しつづける苦境にある無数の難民・移民・追放者の状態の間のコントラストを展開させていく (p. 332)。

91. Said, *Culture and imperialism*, 50.

92. Said, *Culture and imperialism*, 195; パリーの留保を彼女の 'Imagining empire', 182-83 および 'Overlapping territories, interwined histories: Edward Said's postcolonial cosmopolitanism', in Sprinker, editor, *Said*, 19-45 の中に見つけることが出来る。

93. Said, *Culture and imperialism*, 266, 278. サイードは Guha R. and Spivak G. C., editors, 1988: *Selected subaltern studies*. New York: Oxford University Press, v-x.への「序文」において彼がどんなに多くをグラムシに負っているか記している。サバルタン研究のプロジェクトはサイードの研究について考える上では特別な関わりを持つ。というのも、それが西洋のヒューマニズム、ポスト構造主義、ポスト植民地主義の関係をめぐる議論の中の試金石となっているからである。私は Gregory, D. 1994: *Geographical imaginations*. Oxford and Cambridge, MA: Blackwell, 183-93 においてこの議論の概略を記している。

94. Said, *Culture and imperialism*, 51, 318.

95. Said, Inteview, 2-3.

96. 多くのコメンテーターが私に賛成してくれた。しかしながら意見を異にする者もいる。歴史家のジョン・マッケンジーがその最たるものである。けれども、サイードの議論を彼は包括的に誤って伝えているものと私は考える。Mackenzie , J. 1993: Occidentalism, counterpoint and counterpolemic. *Journal of Historical Geography* 19, 339-44; また Mackenzie, J. 1994: Edward Said and the historians. *Nineteenth-century Contexts* 18, 9-25 を見よ。

97. Adorno, T. 1993: Bourgeois opera. In Levin, D. editor, *Opera though other eyes*. Stanford, CA: Stanford University Press, 25-43 を見よ。オペラは 20 世紀後半には、公演と同様に録音を通してヨーロッパと北アメリカにおいてより多くの聴衆を引き付けているのである。また、シカゴへと向かう途上で、私はエルトン・ジョンとティム・ライスが最近、ディズニーがブロードウェイに持ち込もうとしたバージョンの「アイーダ」を共演していることを知った。*Time*, 13 March 1995 を見よ。.

98. Mariette to Du Locle, in Busch, H. 1978: *Verdi's* Aida: *the history of an opera in letters and documents*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press, 11.

99. 話の筋の中でマリエットの関わった部分は議論の余地を残している。マリエットは「アイーダ」が依拠する短い物語のための素材は、1866 年の高地エジプトの考古学的な旅行（その主たる目的はパリ博覧会のために人工物を収集することであった）の際に集められたものと主張する。彼の息子エドゥアルドはのちに、このストーリーの最初のバージョンの草案は彼が書いたのだと主張したが、多くの批評家たちはそれが証明されることはないと考えている。マリエットであることは極めて明白なのである。「結果として『アイーダ』は私の仕事なのだ」と彼は述べた。「私は上演の指図をするようヘディーヴに納得させた一人なのだ。『アイーダ』は一言で言えば私の頭の中で創られたものなのだ」: Busch, Verdi's *Aida*, 186。問題はさらに複雑である。というのも、もっと後に、ヴェルディはマリエットの貢献を軽んじているが、それはおそらくは著作権訴訟の脅威に対するヴェルディの反応と説明され得るだろう。さらに問題なのは、この作品の草案が「ナブッコ」——この二つのオペラは類似している——の台本を提供し、またスエズ運河開通の祝典を組織したテミストクル・ソレラ Temistocle Solera のものであるという指摘である。「ソレラとの和解を 20 年以上にわたってヴェルディが拒絶したことは問題を呼んだに違いない。「アイーダ」の作者がソレラであることを言っているようなものである。ソレラは、原作者であることを主張しきれなかったために、彼はマリエットの評判を落としたりヘディーヴを中傷したりせざるを得なかったのである」。Phillips- Matz, M. J. 1993: *Verdi: a biography*. Oxford: Oxford University Press, 570-72 を見よ。人がこの全てを理解しようが、私自身の議論は、マリエットが話の筋に関係があったかどうかよりは、それについては疑う余地のない上演の際の彼の役割の方ににより多く依拠しているのである。

100. Said, Empire at work, 126.

101. Arblaster, A. 1992: *Viva la liberta! Plitics in opera*. London: Verso, 141-44; また Mackenzie, Said and the historians も見よ。

102. Said, Empire at work, 114.

103. Celik, *Displaying the Orient*, 115-16.

104. Mariette to Du Locle , Busch, *Verdi's* Aida, 11.

105. Mariette to Draneht, Busch, *Verdi's* Aida, 33-34.

106. Mariette to Draneht, in Busch, *Verdi's* Aida, 209, 強調筆者。

107. 私は 1981 年にフランクフルト歌劇場の「アイーダ」の上演を迎えたときに受けた侮辱について考えている。第二幕の緞帳が上げられた時、聴衆は「何かしらその鏡像を、すなわち 1872 年のスカラ座におけるこのオペラのヨーロッパ初演第一夜の聴衆の鏡像をステージに見たのである」。Weber, S. 1993: Taking place: toward a theatre of dislocation . In Levin, editor *Opera through other eyes*, 107- 46. ウェーバーが記しているように、このような仕方でそれ自体のステージに注目が集まるような上演はまた、オペラに対する「個人主義的な態度」をも問題視する (p. 113)。

108. Mitchell, *Colonising Egypt*, 12.

109. Comoli, J.- L. 1980: Machines of the visible. In de Lauretis, T. and Health, S., editors, *The cinematic apparatus*. New York: St Martin's Press, 122-23.

110. Mariette to Draneht, in Busch, *Verdi's* Aida, 225.

111. Mitchell, *Colonising Egypt*, 29-30; de Nerval, G. *Oeuvres* I, 878-79, 882, 883 (『ネルヴァル全集』筑摩書房) . パリ・オペラ座は、1827 年にロッシーニの「モーセ」(セットの一部は『エジプト誌』をもとにしていた)、1850 年にドーベールの「放蕩息子」(セットと衣装はシャンポリオンの『エジプトとヌビアのモニュメント』からのものである) を含む一連のオリエンタリズム的なオペラの上演を行った。Humbert, J.- M., Pantazzi, M. and Ziegler, C. 1994: *Egyptomania : L'Égypte dans l'art occidental 1730-1930*. Paris: Louvre, 395 を見よ。

112. Mariette to Draneht, in Busch, *Verdi's* Aida, 33, 44; Humbert et al., *Egyptomania*, 423-28.

113. Southworth, A. 1875: *Four thousand miles of African travel*. New York: Baker, Pratt; London: Sampson& Low, 45-47,強調筆者。

114. Phillips-Matz, *Verdi*, 570.

115. Said, Empire at work, 118, 120.

116. Said, Empire at work, 124-25.

117. Budden, J. 1992: *The operas of Verdi. Vol. 3: from* Don Carlos *to* Falstaff. Oxford: Clarendon Press, 183.

118. オペラ評論家フィリッポ・フィリッピのミラノの新聞 *La Perseveranza* における記事。Osborne, C. 1987: *Verdi: a life in the theatre*. London: Weidenfeld & Nicolson, 223 所収。

119. Southworth, *Four thoousand miles*, 45.

120. *A handbook for the traveller in Egypt*. London: John Murray, 1873, v; この改訂版は 1863 年から 1871 年の間に行われた一連の訪問にもとづいている。

121. Said, Empire at work, 128; サイードは特に Landes, D. 1958: *Bankers and pashas*. Cambridge, MA: Harvard University Press を引用している。

122. *Handbook*, 1401; Ferguson, R. 1873: *Moss gathered by a rolling stone*. Carlisle: Thurnam, 18; Fromentin, E. 1935: *Voyage en Égypte (1869)*. Paris: Ed. Montaigne, 143; Leland, C. 1874: *The Egyptian sketch book*. New York: Hurd & Houghton, 87-88. See also Abu- Lughod, J. 1971: *Cairo: 1001 years of the city victorious*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 98-117; Scharabi, M. 1989: *Kairo: Stadt und Architektur in Zeitalter des europaischen Kolonialismus*. Tubingen: Ernst Wasmuth.

123. Woolf, P. 1988: Symbol of Second Empire: cultural politics and the Paris Opera House. In Cosgrove, D. and Daniels, S., editors *The iconography of landscape: essays on the symbolic representation, design and use of past environments*. Cambridge: Cambridge University Press, 214-35; 引用は p. 219 より。

124. Mostyn, T. 1989: The finest opera house in the world. In *Egypt's belle époque: Cairo 1869- 1952*. London: Quartet, 72-82.

125. Said, Empire at work, 129-30. ガルニエのオペラ座はまた、第二帝制期のパリの中心部にあって分離の美学を実現させていた。西部地区の裕福さと東部地区の貧困の分裂を劇化させていたのである。ある批評家によると、それはまた「富で覆い隠されたこの時代の貧困のショウ・グラウンド」であるファサードにもあらわされていた。Woolf, Symbol, 229.

126. これについてはその詳細を Gregory, D. in preparation: *Describing Egypt*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press, London: Routledge のなかで議論している。

127. この議論の目的として、私は空間の表象がサイードが記述する類の文化的選別 distinction のなかに巻き込まれるような仕方に焦点を合わせている。というのも、これが彼の主たる関心事であるからだ。またこれについては、今日の我々の学科におけるいくつかの最も革新的な研究によって共有されるようになってきている: Keith, M. and Pile, S., editors, *Place and the politics of identity*. London: Routledge を見よ。しかし、植民地主義と帝国主義の心象地理に関するより包括的な議論はまた、こうした文化的差別に「自然」の表象が入り込んでくるその仕方についても考慮しなければなるまい。私はとくにマイケル・タウシグ Michael Taussig の著作 *Shamanism, colonialism and the wild man* (Chicago: University of Chicago Press, 1987) , 74-92 に記されている、景観と自然と南アメリカの熱帯雨林に関してたいそう立派に記述された植民地アイデンティティとの結びつきについて考えている。私は例えば、西洋がナイル川流域を占有する一方で、詩的にも物理的にもその土着の住人たちを砂漠に同化させ、またアイデンティティの植民地的・帝国主義的な構築を通じてこれらの言説戦略を立ち働かせてきた 19 世紀ヨーロッパのエジプトの心象地理についても同じように示し得るのではないかと思っている。

128. Fanon, F. 1986: *Black skin, white masks*. London: Pluto Press (originally published in Paris, 1952: 海老坂武・加藤晴久訳『黒い皮膚・白い仮面』みすず書房) ; Fanon, F. 1967: *The wretched of the earth*. Harmondsworth: Penguin Books (originally published in Paris, 1961: 鈴木道彦・浦野衣子訳『地に呪われたる者』みすず書房) ; Said, *Culture and imperialism*, 267-68, 351n. バーバ

ず書房）; Said, *Culture and imperialism*, 267-68, 351n. バーバとサイード（そしてその他の人々）による対照的なファノンの奪用については Gates, H. L., jr 1991: Critical Fanonism. *Critical inquiry* 17, 457-70 を見よ。

129. このパラグラフは Spitz, E. H. 1989: Psychoanalysis and the legacies of antiquity. In Gamwell L. and Wells, R., editors, *Sigmund Freud and art: his personal collection of antiquities*. New York: Harry Abrams, 153-71; Torgovnick, M. 1990: Entering Freud's study. In *Gone primitive: savage intellects, modern lives*. Chicago, IL: University of Chicago Press, 194-209; Forrester, J. 1994: 'Mille e tre': Freud and collecting. In Elsner, J. and Cardinal, R., editors, *The cultures of collecting*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 224-51 に依拠している。

130. 私はこの示唆を Kuspit, D. 1989: The analogy of archaeology and psychoanalysis. In Gamwell and Wells, editors, *Freud and art*, 133-51 から受けた。

131. Frayling, C. 1992: *The face of Tutankhamun*. London: Faber & Faber を見よ。ハワード・カーター Howard Carter が最初にこの墓に入った際に、偶然にも、彼は「最初の印象は、消失した文明のオペラの道具部屋といったものだった」(p. 4) と記録している。前世紀における考古学と帝国の結びつきについては Fagan, B. 1992: *The rape of the Nile: tomb robbers, tourists and archaeologists in Egypt*. Wakefield, RI: Moyer Bell に記述されている。

132. Freud to Fliess, 1 February 1900, in Masson, J. M., editor, *The complete letters of Sigmund Freud to Wilhelm Fliess 1887-1904*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 398.

133. Said, *Culture and imperialism*, 268. サイードの議論は一般的なものであるが、ファノンのヨーロッパ中心的な精神分析批判をめぐる議論については McCulloch, J. 1983: *Black soul, white artifact: Fanon's clinical psychology and social theory*. Cambridge: Cambridge University Press を見よ。

134. Said, *Culture and imperialism*, 56.

135. Samuel, R. 1994: *Theatre of memory. Vol. 1: the past and present in contemporary society*. London: Verso.

136. この記述はすべてルクソール・ラス・ヴェガスによって制作された 1993 年 10 月のオープンのためのプロモーション資料から取られたものである。また Chabon, M. 1994: Las Vegas: glitz and dust. *New York Times Magazine* 13 November. も見よ。